可児市埋文調査報告　61

宮之脇7号墳発掘調査報告書

2024

岐阜県　可児市

可児市埋文調査報告　61

宮之脇7号墳発掘調査報告書

2024

岐阜県　可児市

例　　言

1．本書は、岐阜県可児市川合北二丁目 158 番に所在した宮之脇 7 号墳の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、可児市経済交流部歴史資産課が開発者である株式会社佐合木材から委託を受け、令和 5 年 8 月 29 日から令和 5 年 11 月 17 日にかけて実施した。整理作業は令和 6 年度に実施した。

3．調査組織は下記のとおりである。

経済交流部長	渡辺勝彦
歴史資産課長	飯田好晴
文化財係長	松田篤
調査・整理担当者	長江真和

4．調査参加者は下記のとおりである。
工藤雅子、小鷹夏子、後藤美都子、柴田由美、髙橋涼子、増田耕作、水野耕治

5．本書の執筆･編集は長江が行った。基本的な実測及びトレースは長江、工藤、小鷹、髙橋が行い、第 3 章第 2 節遺物鉄製品の実測及び所見は鈴木一有が行った。遺構、遺物の写真撮影は長江が行った。

6．発掘調査前・後の地形測量業務は株式会社イビソクに、保存処理は古美術修理すぎもとに委託した。

7．現地調査及び整理作業の過程で、下記の各氏及び各機関に多大なるご指導とご協力を賜った。深く感謝する。
（敬称・肩書略、五十音順）
秋松大充、浅井飛音、石川愛悠、伊藤佑真、岩原剛、河野和弘、金宇大、木下孔暉、栗谷本真
近藤大典、酒井将史、島田崇正、鈴木一有、砂田晋司、中井正幸、長瀬治義、橋本裕子
服部哲也、林順、早野浩二、深谷淳、保谷里歩、三好清超、村上慶介、森島一貴、若山鈴奈

8．土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2006『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

9．本書に掲載した出土遺物、図面、写真は、すべて可児市（可児郷土歴史館）で保管している。

目　　次

例言

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第２章　地理的・歴史的環境 …… 3

第３章　調査成果
　第１節　遺構 …… 6
　第２節　遺物 …… 11

第４章　まとめ …… 22

写真図版 …… 25

挿図目次

第１図　調査前地形測量図 …… 2
第２図　周辺遺跡地図 …… 5
第３図　調査後墳丘測量図（川原石なし）…… 7
第４図　調査後墳丘測量図（川原石あり）…… 7
第５図　A-A’土層図 …… 8
第６図　A-B 土層図 …… 8
第７図　C-C’土層図 …… 8
第８図　D-D’土層図 …… 8
第９図　宮之脇７号墳出土遺物１…… 11
第 10 図　宮之脇７号墳出土遺物２ …… 12
第 11 図　宮之脇７号墳出土遺物３ …… 14
第 12 図　宮之脇７号墳出土遺物４ …… 15
第 13 図　宮之脇７号墳出土遺物５ …… 16
第 14 図　宮之脇７号墳出土遺物６ …… 17
第 15 図　宮之脇７号墳出土遺物７ …… 18
第 16 図　宮之脇７号墳出土遺物８ …… 20
第 17 図　宮之脇７号墳地形測量図（推定線あり）… 22
第 18 図　川合地区の古墳変遷 …… 24

表目次

第１表　土器・陶器観察表 …… 21
第２表　埴輪観察表 …… 21
第３表　鉄製品観察表 …… 21

第１章　調査に至る経緯と経過

経緯

令和４年、株式会社佐合木材が可児市川合北二丁目地内において宅地造成工事を計画し、計画地内には宮之脇７号墳が所在した。

計画地の東側には以前名古屋鉄道株式会社の教育センターが建設されており、昭和 49 年に記録保存の発掘調査が行われ、昭和 51 年に発掘調査報告書が刊行されている。その報告書にもあるように宮之脇７号墳は現状保存され、報告書の記載には「円墳」であることと「大正時代から昭和初年にかけて開墾作業が行なわれ、その折に直刀が出土したと言い伝えられている。なおこの直刀の出土した地点は雨が降ると血のように赤くなったとの古老の話である。なお、直刀について調査したが所在不明である」とある。

現状保存されてきた宮之脇７号墳の取り扱いについて事業者と協議の結果、現状保存が難しいため、工事前に記録保存のための調査を行うこととなった。

令和５年８月７日に株式会社佐合木材と委託契約書の締結を行い、令和５年８月 29 日から 11 月 17 日まで発掘調査を行った。

事務手続き

市発	令和５年８月 30 日	歴第 82 号	埋蔵文化財発掘調査の報告
県発	令和５年９月５日	文伝第 139 号の３	埋蔵文化財発掘調査（通知）
市発	令和５年 12 月３日	歴第 119 号	発掘調査終了報告書

経過

宮之脇７号墳は、見た目から直径 10.0m 程度の円墳と考えられ、北側と東側には幅 1.5m 程度の周溝らしき窪みがみられた（第１図）。これらから古墳時代後期に川合地域に多くみられる川原石積みの横穴式石室を埋葬施設とする円墳だと想定された。ただ、開口していないことや墳丘の高さが低いという点について調査開始当初の時点で疑問があったが、『宮之脇遺跡発掘調査報告書』の内容にあるように直刀が出土したということから開墾により埋葬施設の床面付近まで改変が入り、改変後に埋め戻し等が行われ、現状のようになっているという想定のもと調査を行った。

初めに、墳頂部分に堆積した後世の土を除き、石室石材の検出等を行い、開口方向を把握した後に古墳の断ち割りラインの設定を行うこととした。墳頂の中央付近には大きな根があるため、中央付近に 4.9m × 3.5m のトレンチを設定し、根をよけながら地表面から掘削を行った。

墳頂部から下に掘り進めると、瓦やガラスなど現代の廃棄物が混じる黒色土が下に続いた。下げていく中で石室石材は検出されず、墳頂部から 1m ほど下がった、84.2m 付近で鉄鏃がある程度のまとまりで６点出土した。また、その付近でガラス瓶がみつかり、中に入った紙に、「昭和 49 年８月 15 日　宮之脇遺跡発掘現場　西隣古墳の芋穴（1.4m × 0.8m × 1.2m）を発掘現場の黒土層をもつて埋もどした　現場写真は可児町教育委員会に保存　　立会者　宮之脇発掘調査団　主任調査員　大江　現場主任　可児鋼平　教育委員会　田口茂（原文ママ）」と書かれていた。これにより昭和 49 年時点ですでに宮之脇７号墳は大きく損壊しており、調査前にみられたような形状に土を盛って古墳を復元していたことが明らかとなった。この記録は報告書にも記述がなく、当時の写真や記録類

も探してみたが、見つけることはできなかった。

古墳自体に大きく改変が入っていることが明らかとなり、埋葬施設の検出が困難であることから羨道や前庭部、周溝から先に調査を行う方針へと転換した。その際に墳頂部のトレンチの堆積状況（第５・６図）から後世に盛られた土部分を重機により除去し、残存する墳丘の検出を行った。昭和以降の盛土として墳丘全体に黒色土が 20 ～ 50cm 盛られており、その土の中には現代の廃棄物がみられた。後世に盛られた土は南から東にかけて多く、西側は少ない傾向があった。

古墳の南面を下げていくが前庭部はみつからず、残存する葺石と墳丘端、周溝のラインが明らかとなり、墳形が円墳ではなく、方墳であることが明らかとなった。また、周溝の埋土から埴輪片、土師器が出土し、須恵器が出土しないことから時期的に埋葬施設が横穴式石室ではなく、竪穴系であることが想定され、埋葬施設は後世の改変により滅失していることが土層から把握できた。

古墳の全貌を明らかにするため、改変部分を避けて古墳の規模、構築状況がとらえられるよう南北、東西に墳丘断ち割りトレンチを設定した。また、四方向の周溝部分の掘削を行った。

調査の結果、改変が多く入っているが、古墳時代中期の一辺約 14.6m の方墳であることが明らかとなり、完掘後に地形測量、空中写真撮影を行い、調査を終了した。

第1図　調査前地形測量図

第２章　地理的・歴史的環境

地理的環境

可児市は、岐阜県中南部、木曽川中流左岸に位置し、東は土岐市、北東は御嵩町、西は坂祝町、南は多治見市と愛知県犬山市、北は木曽川を隔てて美濃加茂市、八百津町とは地続きに接している。平成 17 年 5 月に可児郡兼山町と飛び地合併した。

地質的には、美濃加茂盆地の南部にあたり、木曽川と可児川およびその支流の久々利川に沿う低地には、洪積層と沖積層が広がっている。可児市南部に広がる丘陵は、東濃地方を中心に分布する瑞浪層群から成り立ち、蜂屋層、中村層、平牧層の 3 層に区分されている。土田地域から帷子地域の北部にかけては蜂屋層、可児川周辺では中村層、羽崎・二野地域周辺では平牧層が、それぞれ丘陵の裾部で確認される。主に凝灰質砂岩から成る平牧層は、多くの動植物化石を産出する他、露頭する部分で横穴墓が多数造られ、石材を使用した石棺の制作も盛んであった。

宮之脇 7 号墳が所在する川合地域は木曽川左岸の低位段丘面にあり、飛騨川との合流地点南側に位置している。

歴史的環境

宮之脇 7 号墳(1)が所在する川合地域には、縄文から近世まで多くの遺跡が所在する。特に、昭和から平成にかけて宅地開発等が進み、多くの遺跡が調査された。その調査以前に滅失してしまっている古墳などもあるが、報告書をもとに古墳等の位置関係を第 2 図に記した。

宮之脇 2 号墳（3）は直径約 12.0m の円墳と推定され、6 世紀末から 7 世紀初めに築造されている。埋葬施設は川原石積みの横穴式石室であり、銀象嵌直刀（市指定）や須恵器などが出土している。宮之脇 3 号墳（4）～宮之脇 5 号墳（6）は川原石積みの横穴式石室の一部が検出されている。宮之脇 10 号墳（10）は造り出し付きの円墳である。埋葬施設や外表施設は消失しているが、造り出し部を通る主軸長は、21.0m を測る。周溝から須恵器や土師器、鉄器などが多数出土し、最も古い須恵器は 6 世紀前半頃を示す。宮之脇 12 号墳（12）も 10 号墳と同様の時期に築造されている。宮之脇 11 号墳(11)は、6 世紀初め頃に築造された造り出し付の円墳である。周溝のみが残存していたが、周溝の中から須恵質円筒埴輪や鳥つまみ蓋付須恵器（市指定）が出土している。

稲荷塚 1 号墳（16）は、直径 21.5m を測る三段築成の円墳である。埋葬施設は川原石積み横穴式石室であり、6 世紀末から 7 世紀初め頃に築造されている。須恵器や土師器、銀装の直刀や鉾、鉄鏃などの鉄製品、ガラス製丸玉などの玉類が副葬されていた。直径 18.5m を測る円墳である稲荷塚 2 号墳（17）、直径 12.0m を測る稲荷塚 3 号墳（18）もほぼ同時期に築造されており、周溝の覆土の堆積状況から 1 号墳、3 号墳、2 号墳の順に築造されている。

次郎兵衛塚 1 号墳（20）は、一辺 29.5m を測る二段築成の方墳である。埋葬施設は 3 つの川原石積み横穴式石室があり、主室は 7 世紀初め頃に築造されている。当地域の首長墳といえる。次郎兵衛塚 3 号墳（22）は直径 14.0m を測る 6 世紀末から 7 世紀初め頃に築造された円墳である。この 3 号墳と墳丘を共有するように 7 世紀前半に次郎兵衛塚 4 号墳（23）の石室が築かれている。次郎兵衛塚 5 号墳（24）は墳丘が削平されているが、検出された周溝から一辺が 15.0m の方墳である。7 世紀前半頃に築造され、埋葬施設からは須恵器、土師器、鉄鏃や刀子などの鉄製品などが出土している。

宮之脇遺跡Ａ地点（30）は縄文から奈良時代、中世の集落跡であり、90 軒をこえる竪穴住居跡、掘立柱建物、土坑など多数の遺構が検出されている。宮之脇遺跡名鉄地点（31）は旧石器時代の石刃が出土している他、縄文、弥生、古墳時代の住居跡、中世の集石遺構が検出されている。また、同地点に含まれる宮之脇１号墳（2）は５世紀末頃に築造された方墳である。埋葬施設は削平されているが、東西 16.1m、南北 17.2m を測り、川原石の葺石を有する。宮之脇遺跡Ｂ地点（32）は旧石器時代のナイフ形石器が出土している他、主に縄文時代中期後半の住居跡や土坑、性格不明ピットが多数検出され、埋甕を含め多くの土器が出土している。

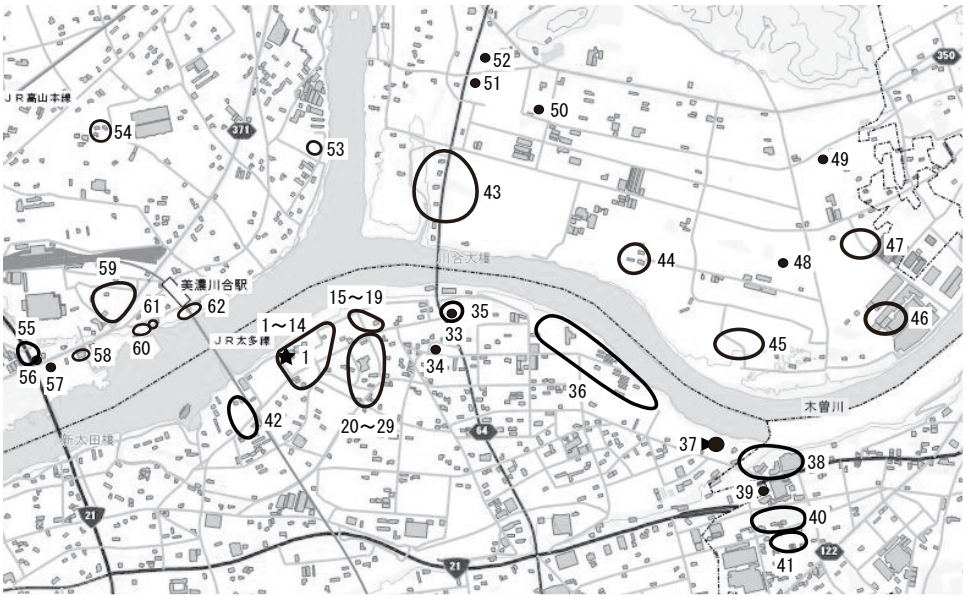
東畑古墳（33）は７世紀前半頃に築造されているが、墳丘、石室ともに乱掘による破壊がひどく、墳形や規模は不明である。川合雨池古墳（34）は令和２年度に調査を行い、墳丘や周溝が削平されているが、石室の側壁が一部検出された。遺物は出土しなかったが、土地所有者の話では過去にこの場所から銀装大刀や耳環が出たといわれる。

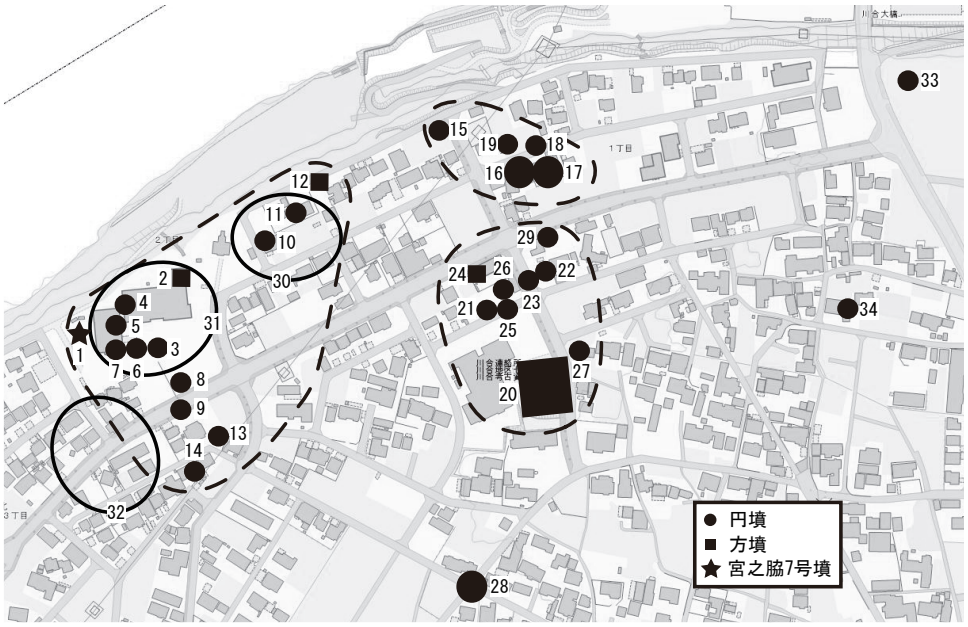
川合遺跡（35）は７～８世紀代の住居跡が中心であるが、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、山茶碗と幅広く出土している。幅約 2.2m の溝がクランク状に延べ 75.0m にわたり検出され、溝内部からは 18 世紀後半から 19 世紀代の陶器が大量に出土した。東野遺跡（36）は縄文時代から中世の複合遺跡であり、住居跡や掘立柱建物が検出されている。川合遺跡とも近接することから一連の集落跡の可能性もある。

狐塚古墳（37）は６世紀中頃から後半に築造された墳長 63.0m を測る前方後円墳である。埋葬施設は、凝灰質砂岩の石棺を納めた川原石積みの横穴式石室である。

浦畑遺跡（40）は鎌倉時代前期から江戸時代にかけての土塁、地境溝、掘立柱建物跡、井戸跡が確認された。上恵土城跡（41）は鎌倉時代後期から江戸時代にかけての遺構や遺物が確認され、室町時代を中心に掘立柱建物跡や井戸跡、城館を囲む溝跡を確認した。

木曽川の右岸である美濃加茂市側である牧野小山遺跡（43）は試掘含め５回の発掘調査が行われ、縄文時代中期、弥生時代中期、古墳時代、古代の竪穴住居跡が検出されている。特に古墳～古代に属する住居が遺跡の東側に広がりをみせている。岐大農場遺跡（44）は、縄文時代中期の土器や磨製石斧等が採集されている他、小貝戸遺跡（47）は、縄文時代中期後半の土器や石棒、土偶などが採集されている。調査が行われた神明遺跡（46）では、縄文時代中期後半にあたり、４軒の住居跡が検出され、土器や石器などが出土している。弥生時代の遺跡としては、川合東遺跡（53）、切通遺跡（54）、川合西遺跡（62）があげられる。木曽川右岸にも古墳が点在しているが、その多くが滅失しているため、様相は不明瞭である。





番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	宮之脇7号墳	22	次郎兵衛塚3号墳	43	牧野小山遺跡
2	宮之脇1号墳	23	次郎兵衛塚4号墳	44	岐大農場遺跡
3	宮之脇2号墳	24	次郎兵衛塚5号墳	45	花之下遺跡
4	宮之脇3号墳	25	次郎兵衛塚6号墳	46	神明遺跡
5	宮之脇4号墳	26	次郎兵衛塚7号墳	47	小貝戸遺跡
6	宮之脇5号墳	27	次郎兵衛塚8号墳	48	小貝戸2号古墳
7	宮之脇6号墳	28	古墳(聞き取り調査)	49	火塚古墳
8	宮之脇8号墳	29	次郎兵衛塚9号墳	50	下牧野古墳
9	宮之脇9号墳	30	宮之脇遺跡A地点	51	廻間2号墳
10	宮之脇10号墳	31	宮之脇遺跡名鉄地点	52	廻間1号墳
11	宮之脇11号墳	32	宮之脇遺跡B地点	53	川合東遺跡
12	宮之脇12号墳	33	東畑古墳	54	切通遺跡
13	古墳(聞き取り調査)	34	川合雨池古墳	55	野笹遺跡
14	古墳(聞き取り調査)	35	川合遺跡	56	赤池4号古墳
15	コダマ塚古墳	36	東野遺跡	57	亀淵古墳
16	稲荷塚1号墳	37	狐塚古墳	58	赤池古墳群
17	稲荷塚2号墳	38	長畑古墳群	59	川合川端遺跡
18	稲荷塚3号墳	39	浦畑古墳	60	川合西古墳群
19	稲荷塚4号墳	40	浦畑遺跡	61	川合二ツ塚遺跡
20	次郎兵衛塚1号墳	41	上惠土城跡	62	川合西遺跡
21	次郎兵衛塚2号墳	42	西野遺跡		

第2図　周辺遺跡地図　〔(C)岐阜県の一部を改変〕

第３章　調査成果

第１節　遺構

今回の調査では古墳以外の遺構は確認されなかったため、宮之脇７号墳について述べる。

墳丘

周辺は区画整理されているため、旧地形が把握しづらいが、現況地形をみるに川から南方向に向かって標高が高くなっていく地形である。墳丘長は東西、南北にあけた断ち割りトレンチでは東西約 12.9m、南北約 14.6m を測る。西側が改変に合っていることを踏まえ、古墳の規模を推定すると、一辺約 14.6m を測る方墳である。外表施設の部分で後述するが、盛土内にも川原石を含み、葺石としての川原石と盛土内に含まれた川原石の判別が難しいため、測量図は川原石を含まないものと、含むものの２枚を載せる（第３・４図）。

当地の基本層序は数十 cm の黒色土の下に、部分的に川原石が混じる黄褐色の地山がみられる。古墳時代にもいくらかの黒色土層が拡がっていたと考えられ、周辺で行われた稲荷塚古墳等も黒色土の上に盛土が行われ、墳丘が構築されている。しかし、宮之脇７号墳の墳丘盛土の構築面には、旧表土である黒色土がみられず、混じりがない均一な黄褐色の地山面から盛土が行われている。そのため、古墳築造以前の当地は、黒色土の堆積がなく黄褐色の地山層が露出している状態だったのか、黒色土を削り黄褐色の地山面を整地してから盛土を行ったのか二通りの考え方ができる。近接する宮之脇遺跡（名鉄地点）の調査(※1) でも縄文時代の住居の検出面は「黒黄色層」であり、当地に地山が露出していた場合でも周辺の黒色土とのある程度の混じりが想定されるため、混じりがない均一な地山がみられる点からも後者の可能性が高いと考えられる。なお、構築面の断ち割りを行っているが、黄褐色の地山が下方に続いていた。

両土層断面からみられる墳丘の構築課程は以下の通りである（第７・８図）。

(1) 墳丘を構築するに際し、83.3m 付近の標高で黒色土を除きある程度の整地を行う。この際に黒色土は盛土を行うために除けていたと考えられる。

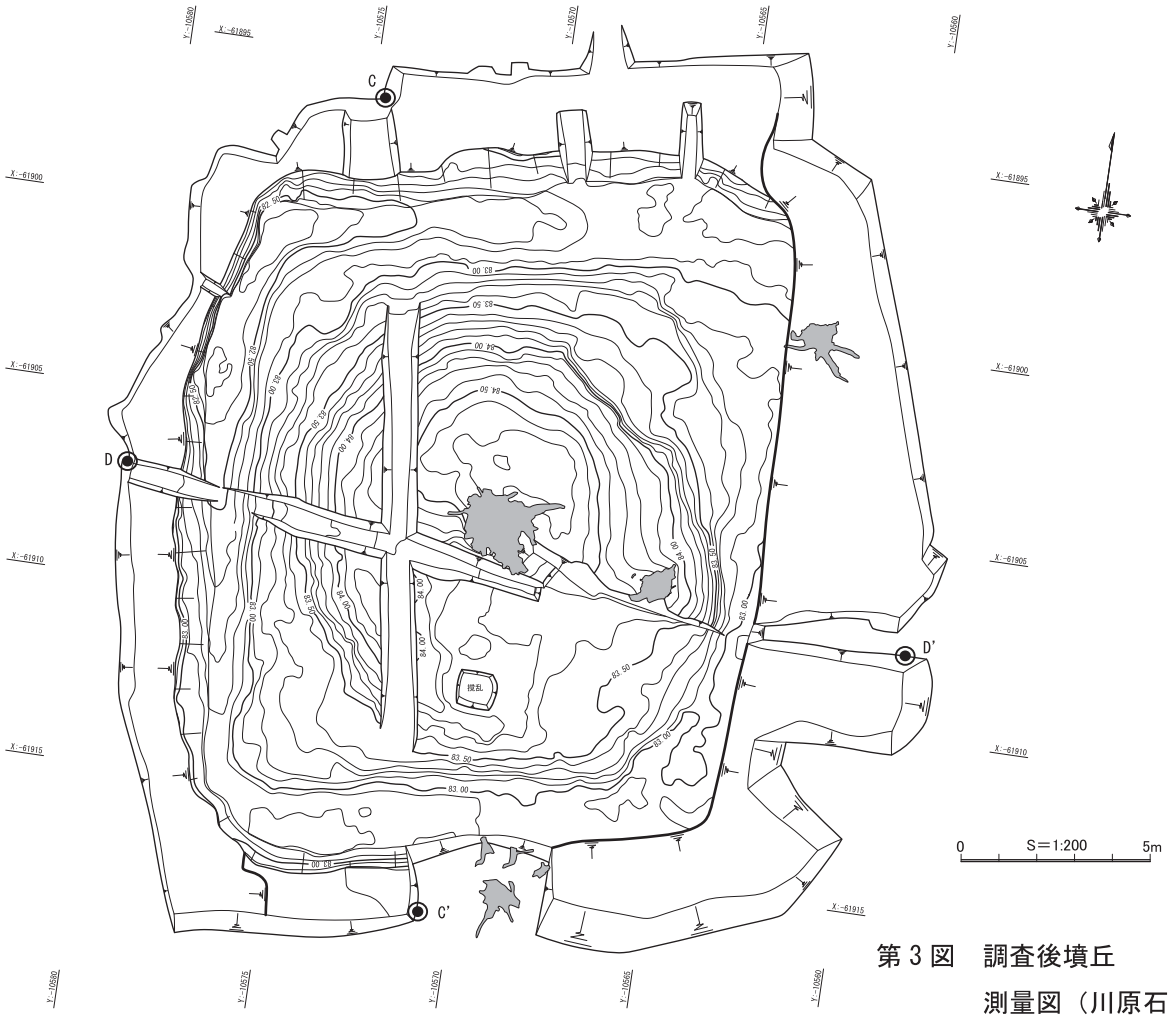
(2) 周溝掘削時に出た地山土を盛り上げ、11 ～ 14、19、28、29、31、34 層の地山と同質の黄褐色砂質土で一段階目の盛土を行う。12、13 層は東に向かって川原石が含まれる傾向があり、31 層も下層に比べ川原石が多く含まれる。他の層に比べ川原石が多く含まれることから、川原石を人為的に混ぜている可能性があることから盛土という判断をした。

(3) 集積しておいた黒色土 15 層を盛る。30 層は (2) の段階とは土質が違うため、墳丘の規模の調整としてこの段階に盛られたのかもしれない。この黒色土内からは縄文土器や土師器（赤彩した破片含む壺 11 点、高坏２点、不明４点）の小破片が出土している。小破片であるため、時期は不明である。

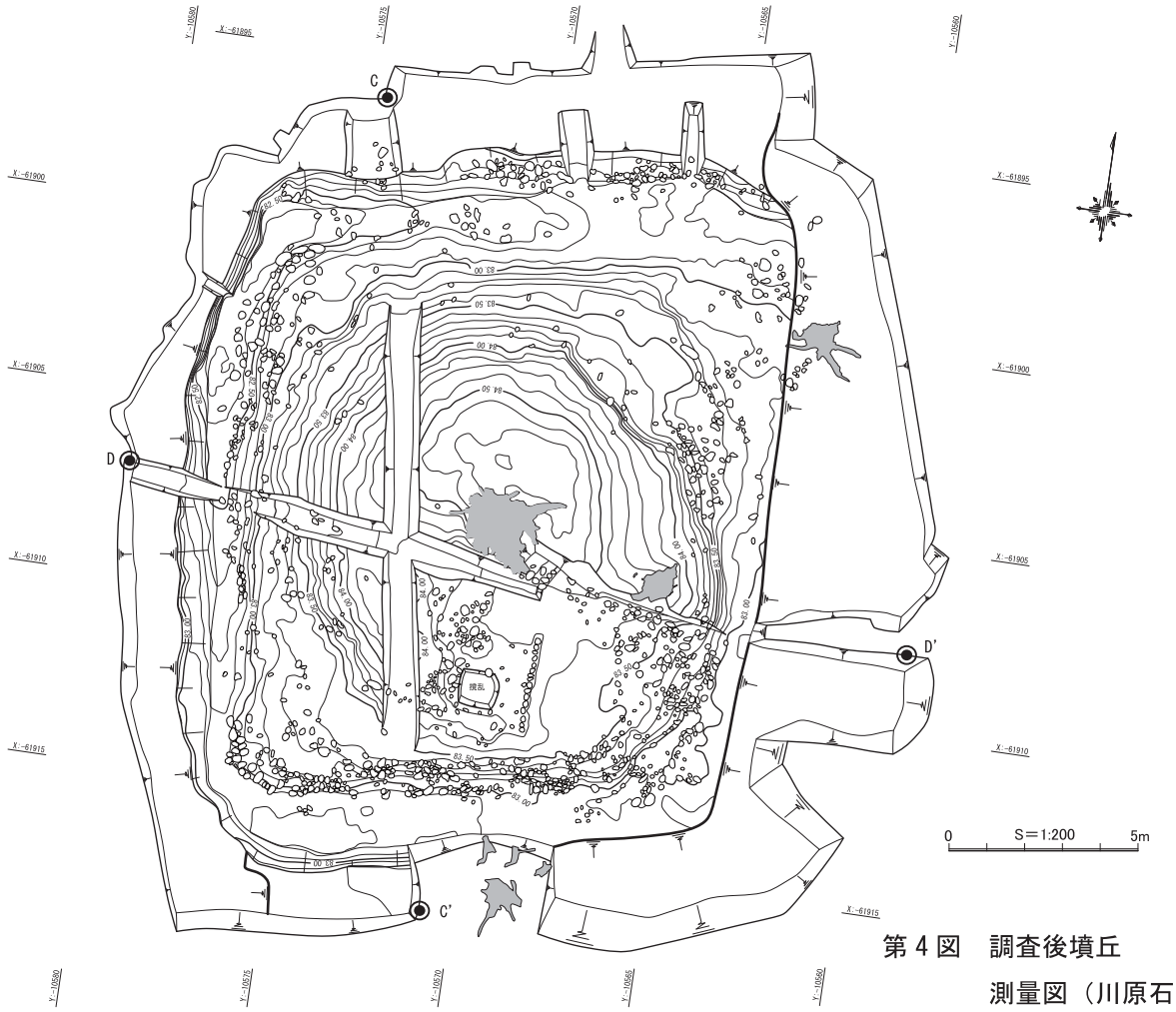
(4) 黄褐色土 16、21、22、33 層を盛る。22 層をのぞき、川原石を含む量は少ない。

(5) 黒色土 17、32 層を盛る。

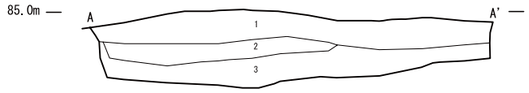
墳丘の上面が削られているため、墳丘の高さは不明であるが、整地を含むと五段階の過程を経て現状の墳丘が構築されていることが分かる。黒色土と黄褐色土の堆積を比較すると、地山である黄褐色土を多く削り盛っている様子がみられ、それらの土の混じりが少ないことからも「削る」、「分け置く」、「盛る」といった工程が丁寧に行われたと考えられる。構築面には大小の川原石が含まれ、



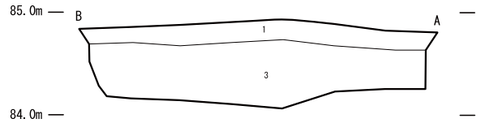
第３図　調査後墳丘
測量図（川原石なし）



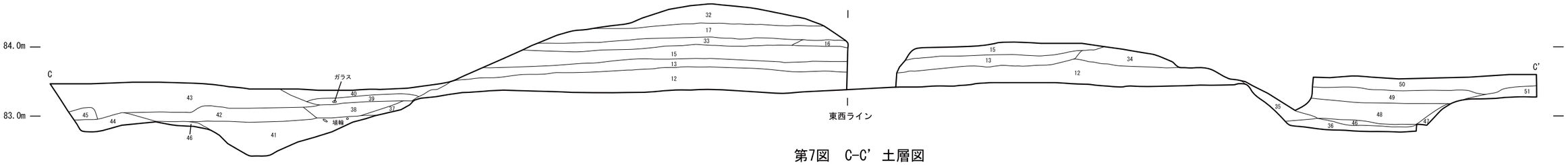
第４図　調査後墳丘
測量図（川原石あり）



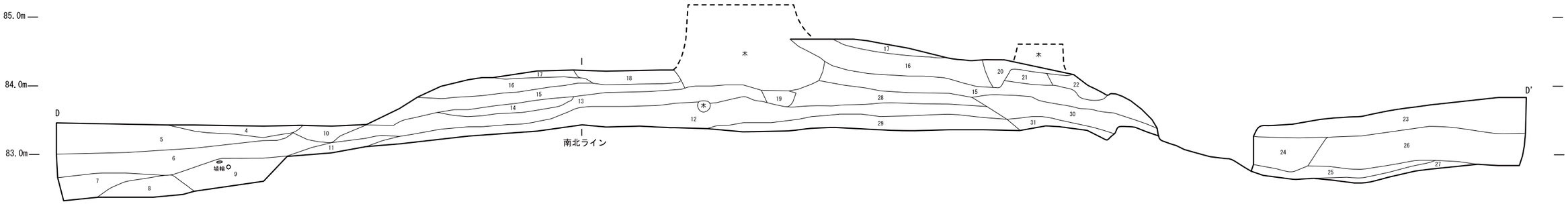
第5図　A-A’ 土層図



第6図　A-B土層図



第7図　C-C’ 土層図



第8図　D-D’ 土層図

0　S=1:60　1m

1	10YR3/3	暗褐色	砂質土	しまり弱い	粘性弱い	φ5～150mmの礫を少量含む〔現代の廃棄物が混じる埋立土〕
2	2.5Y5/2	暗灰黄色	砂質土	しまり弱い	粘性弱い	φ5～50mmの礫を少量含む 〔部分的に1層が混じる埋立土〕
3	10YR2/1	黒色	砂質土	しまり弱い	粘性弱い	φ5～50mmの礫を少量含む 〔現代の廃棄物が混じる埋立土〕
4	2.5Y5/3	黄褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～150mmの礫を少量含む〔腐葉土入る現代の埋立土〕
5	2.5Y5/3	黄褐色	砂質土	しまり強い	粘性弱い	φ5～100mmの礫を少量含む〔6層が部分的に混じる現代の埋立土〕
6	2.5Y2/1	黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～200mmの礫を少量含む〔埴輪と現代の廃棄物が入る堆積土〕
7	N1.5/	黒色	砂質土	しまり強い	粘性弱い	φ5～30mmの礫をわずかに含む〔周溝の立ち上がりが削られた後の堆積土。縄文土器含む〕
8	7.5Y5/1	オリーブ黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～20mmの礫をわずかに含む〔周溝の外側の立ち上がり。地山〕
9	N1.5/	黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～300mmの礫を多く含む〔埴輪と葺石含む周溝の埋土〕
10	10Y3/1	オリーブ黒色	砂質土	しまり弱い	粘性弱い	φ5～200mmの礫を少量含む〔流れた墳丘盛土が堆積した層〕
11	10YR4/2	灰褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～250mmの礫を含む〔墳丘盛土〕
12	2.5Y6/6	明黄褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～250mmの礫を含む〔墳丘盛土。東側の方が礫が多い〕
13	2.5Y5/6	黄褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～200mmの礫を含む〔墳丘盛土。12層に比べ、礫が小粒で中央に向かって量がやや減る〕
14	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～200mmの礫を少量含む〔墳丘盛土〕
15	7.5Y2/1	黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～200mmの礫を少量含む〔墳丘盛土〕
16	2.5Y5/3	黄褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～150mmの礫をわずかに含む〔墳丘盛土〕
17	2.5Y2/1	黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～300mmの礫をわずかに含む〔墳丘盛土〕
18	根カクラン					
19	2.5Y6/4	にぶい黄色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～100mmの礫を含む〔根の浸食をうけた墳丘盛土〕
20	根カクラン					
21	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～200mmの礫をわずかに含む〔16層と同様に盛られた墳丘盛土〕
22	10YR4/2	灰黄褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～100mmの礫を含む〔墳丘盛土〕
23	バラス含む後世の造成土					
24	N1.5/	黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～300mmの礫を多く含む〔礫を多く含む後世の造成土〕
25	10YR2/2	黒褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～20mmの礫をわずかに含む〔後世の造成土〕
26	2.5Y2/1	黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～150mmの礫をわずかに含む〔現代の廃棄物含む後世の造成土〕
27	2.5Y3/1	黒褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～200mmの礫をわずかに含む〔地山〕
28	2.5Y5/4	黄褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～250mmの礫を多く含む〔墳丘盛土。13層に比べて礫が大きい〕
29	2.5Y5/6	黄褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～50mmの礫を少量含む〔礫の混じりが少ない地山と同質の墳丘盛土〕
30	5Y2/1	黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～150mmの礫を多く含む〔墳丘盛土〕
31	2.5Y5/4	黄褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～200mmの礫を多く含む〔29層に比べて礫が多い。地山と同質の墳丘盛土〕
32	5Y3/2	オリーブ黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～120mmの礫を少量含む〔墳丘盛土〕
33	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～100mmの礫をわずかに含む〔遺物を含む墳丘盛土〕
34	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～100mmの礫を多く含む〔墳丘盛土〕
35	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～300mmの礫を含む〔大型の川原石を含む周溝埋土〕
36	2.5Y5/4	黄褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～100mmの礫を含む〔地山〕
37	5Y4/2	灰オリーブ色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～40mmの礫をわずかに含む〔流れた墳丘盛土が堆積した層〕
38	7.5Y2/1	黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～40mmの礫をわずかに含む〔堆積土。時期不明〕
39	10YR3/1	黒褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～30mmの礫をわずかに含む〔現代の廃棄物を含む現代の堆積土〕
40	2.5Y3/1	黒褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～50mmの礫をわずかに含む〔現代の表土層〕
41	N1.5/	黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～350mmの礫を含む〔周溝埋土。落ちた葺石、埴輪片を含む〕
42	2.5Y2/1	黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～100mmの礫をわずかに含む〔38層よりやや土色が暗い堆積土〕
43	2.5Y5/6	黄褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～50mmの礫をわずかに含む〔現代の廃棄物含む造成土〕
44	2.5Y3/1	黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～100mmの礫を少量含む〔後世の造成土〕
45	2.5Y2/1	黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～20mmの礫をわずかに含む〔後世の堆積土〕
46	2.5Y3/1	黒褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～50mmの礫をわずかに含む〔周溝埋土〕
47	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～50mmの礫をわずかに含む〔周溝のたちあがりが崩れた堆積土〕
48	N1.5/	黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～150mmの礫を含む〔49層よりやや土色が明るい埴輪片含む周溝埋土〕
49	N1.5/	黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～200mmの礫をわずかに含む〔埴輪片含む周溝埋土〕
50	10Y2/1	黒色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～30mmの礫をわずかに含む〔現代の廃棄物含む表土層〕
51	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質土	しまりあり	粘性弱い	φ5～50mmの礫を含む〔後世の造成土〕

列状に並んでいるようにみえる川原石もみられた。墳丘や埋葬施設構築の際に目安にした可能性も考えられるが、不明である。

埋葬施設

埋葬施設があったと考えられる墳丘の中央付近は、根の影響や後世の改変が入っているため判然としないが、東西及び南北にあけた墳丘トレンチに墓壙の掘り込んだ形跡がみられないことから、構築墓壙の可能性が考えられる。棺の形態や規模は不明である。

埋葬施設に伴うと想定される遺物として、根撹乱付近の後世の埋立土からは鉄鏃（第 16 図－ 69 ～ 74）や鋲（第 16 図－ 75）が出土している。これらは当古墳の東側に所在した昭和 49 年度に調査された古墳からの混入も想定されるが、東側に所在した古墳は古墳時代後期であり鉄鏃や埴輪の年代観から当古墳の遺物と考えられる。この他に過去の記録では鉄刀が出土しているといわれる(※2)。

周溝

周溝は、南北の状況をみるに幅は約 3.0m と考えられる。北側は後世の堆積である 42、44 層に立ち上がりが削られているが、推定される深さは 0.7m 程度である。南側は周溝が良好に残り、深さは約 0.5m である。50 層より下層は改変の入っていない埋土となり、しまりの弱い黒色土が堆積している。東側と西側は改変が入り、周溝の立ち上がりは滅失している。西側は、8、9 層が周溝の埋土と考えられ、埴輪片などが出土している。それより西側及び上層は後世の改変造成による堆積である。東側は墳端も削られ、26 層から現代の廃棄物がみられることから大きく改変が入っている。墳丘西側では焼成が良好ではない坏身（第 9 図－ 10）と刀子（第 16 図－ 76）が近接して出土しており、周溝掘削時に土坑は検出できなかったが、古墳時代以降の土坑等があった可能性がある。

東側を除く三方向の周溝からは土師器、埴輪片が出土している。

外表施設

墳端には葺石を大小をおり混ぜて葺いているようで、規則性はみられない。また、墳丘の盛土内にも川原石が混ざるため、葺石と判断するのに困難なものがある。南側、西側については墳端の角付近に大きめの川原石が用いられ、列を意図して貼ったような様子が散見されるため、本来はある程度規則性をもって葺いた葺石を有していたと考えられる。北側と西側については後世の改変により葺石を貼ったといえる状況はみられなかった。

周溝から埴輪の出土がみられることから宮之脇 7 号墳の墳丘には埴輪が並べてられているが、墳丘南側の墳端付近にあるやや平坦な面を精査したところ、埴輪の樹立痕は検出されなかった。また、北側及び西側は墳頂から墳端にかけて緩やかに下がっていく墳丘を構築しており、埴輪を並べるような平坦面はみられず、測量後に墳端付近を掘削したが、ここでも樹立痕は検出されなかった。埴輪については破片から推定される個体数が少ないが、後世に削られた墳頂部の平坦面やテラス部分に間隔をあけて樹立していたと想定される。

※ 1　昭和 49 年度の調査では、標高表記がほぼなく、遺構面が明確になっていない。発掘調査前の地表面が 83.0m ～ 83.4m であることから墳丘部分はある程度残されていたが、周溝等周辺は開墾作業等により改変が入っていたことが想定される。

※ 2　昭和 51 年度の調査報告書に記載。

第２節　遺物

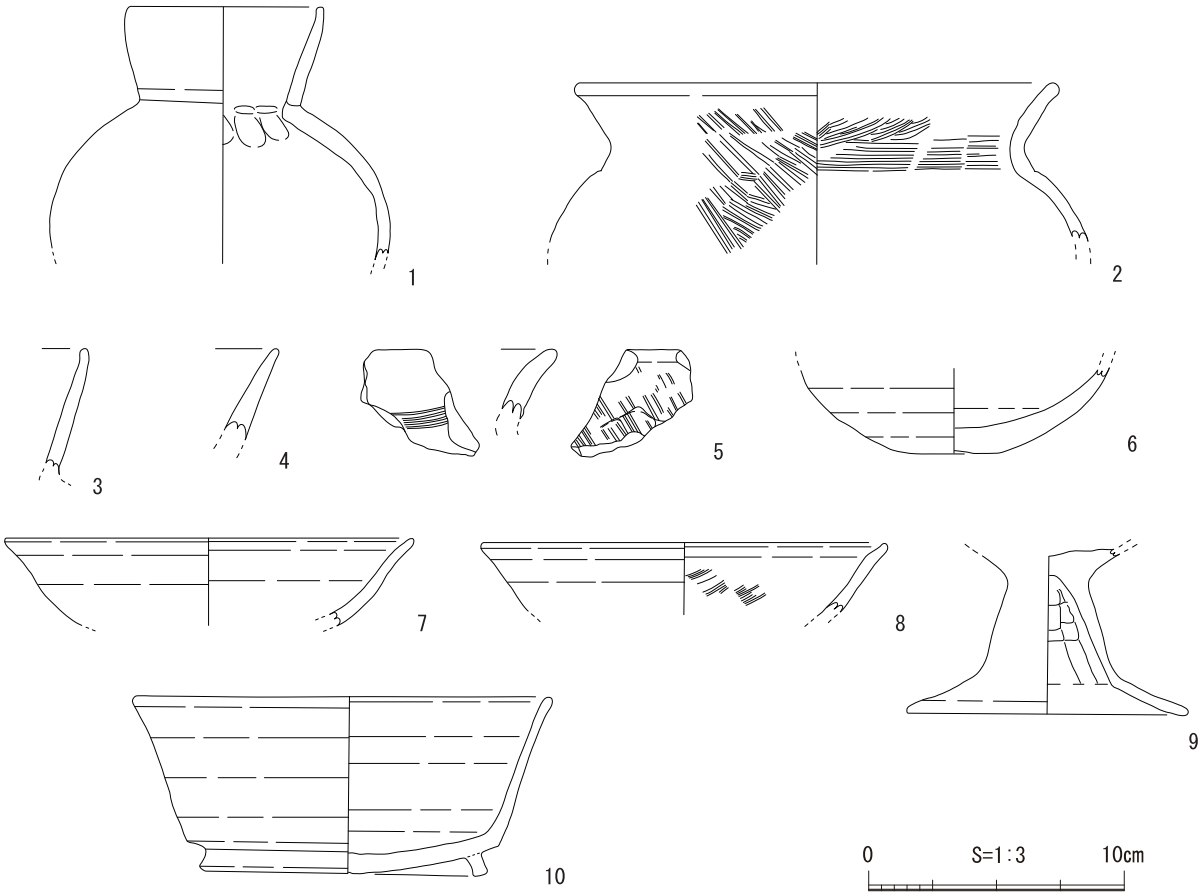
今回の調査では、細片を除き、縄文土器 35 点、土師器 194 点、須恵器３点、山茶碗３点、近世陶器１点、埴輪 922 点、鉄製品が８点出土した。

（１）土器（1 ～ 10）

土器、陶器は、前述した墳丘盛土内以外は主に周溝埋土から出土している。周溝は、改変が入っている部分が多く、調査区内において古墳以外の遺構は検出されてないため、古墳時代以外の遺物は近隣の発掘調査後の土地造成時に混入された可能性が高く、細片が多い。

土師器についても細片のため、器種が分からないものが大半を占めるが、器種が分かるものの多くは壺や高坏が占める。土師器は周溝の南側から多く出土しているが、ある程度のまとまりでは出土しておらず、散在している状況であった。

１は、松河戸Ⅱ式から宇田Ⅰ式の直口壺である。頸部から口縁部に向かってやや開き、口縁部付近では直線的である。頸部と胴部の境には指押さえ痕がみられる。２は甕である。頸部から口縁部にかけてハの字状に開き、口縁端部は丸く収める。内外面にハケ目調整を施す。３～５は壺の口縁部であり、５は内外面にハケ目調整がみられる。７～９は高坏である。９は坏部と脚部が別作りで接合され、脚部は緩やかに裾に向かって開き、脚端部は直線的である。脚部内面に接合時の調整痕と頂部に指押さえの跡がみられる。10 は須恵器の坏身である。焼成状況はやや不良で赤褐色を呈する。底部から口縁部に向けて直線的にのび、口縁端部は丸く収める。底部はややくぼみ、高台は台形状を呈する。

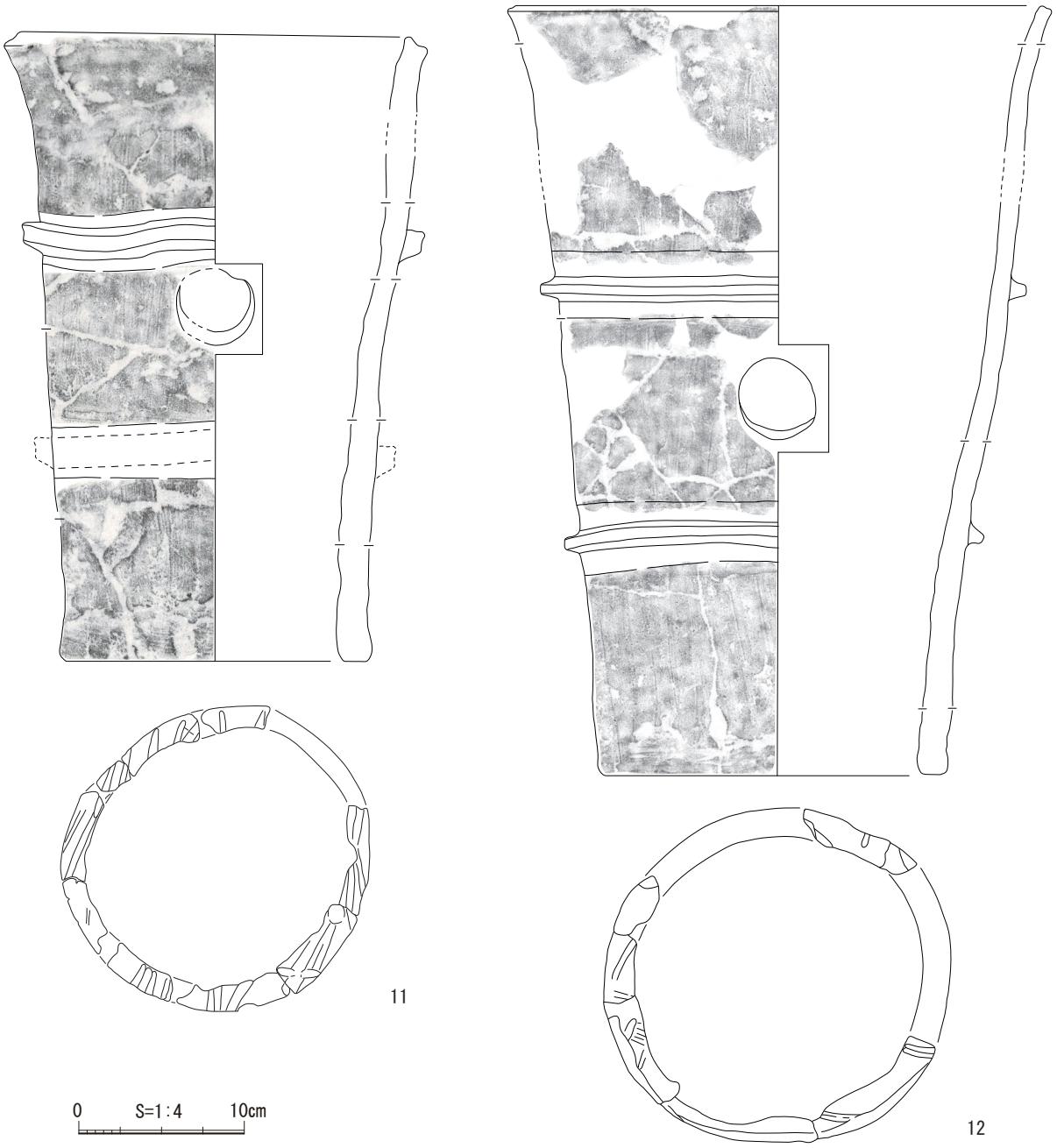


第9図　宮之脇7号墳出土遺物1

（２）埴輪（11 ～ 68）

埴輪は全て円筒埴輪であり、922 点が出土している。色調や胎土からＡ～Ｅの５種類に分けられる。古墳は完掘しているが、改変が入っているためか全体形状がほぼ復元できた個体は２種類（A、B 類）のみであり、その他の３種類（C、D、E 類）は破片で出土し、全体形状は不明である。この５種類ともに無黒斑であり、E 類は明瞭ではないが、外面はタテハケ調整が施される。突帯を貼り付ける目安にした凹線が、Ａ～Ｄ類は約 3mm の幅でみられるが、E 類は約 1mm と幅が狭い。

出土位置は１点（墳頂の後世の埋立土から出土）を除いて周溝から出土している。Ａ類は 90% 程度南から、B 類はほぼ 100％北から、C 類はほぼ 100％西から、D 類はほぼ 100％南から出土し、出土位置に偏りがみられる。E 類は約 60％が北から約 40％が南から、東からもわずかに出土している。



第10図　宮之脇7号墳出土遺物2

A 類（11）

全体形状が復元できた個体であり、2 条 3 段の円筒埴輪である。口径約 23.3cm、底径約 18.2cm、器高 37.8cm を測り、3 段ともにほぼ同じ高さを測るが、全体的に歪んでおり、作りはやや雑である。胎土は密で、1mm 程度の白色の砂粒を含む。焼成はやや不良で器表面や口縁部付近が荒れている。色調は内外面ともに橙色である。口縁部は、直線的な部分と緩やかに外反する部分がみられる。口縁部内面及び上端にはわずかな窪みを有して外側に肥厚する。他の種類より比べ器壁が厚い。1 条目の突帯は全て欠損しており、2 条目の突帯は直線的ではなく、蛇行して貼り付けられ、摩耗している部分が多いが、断面形状は台形を呈する。胴部にあけられた円形の透かしは直径約 4.5cm と 4.8cm であり、一方はややつぶれた形状となる。口縁部下にはタテハケ調整が施されるが、浅いせいか所々摩耗している。内面には指ナデの痕跡がみられ、基部底面には棒状圧痕がみられる。

B 類（12）

全体形状がほぼ復元できた個体であり、2 条 3 段の円筒埴輪である。口径約 31.5cm、底径約 20.2cm、器高は約 46.6cm を測り、1 段目、2 段目の高さはほぼ同じであるが、3 段目はやや高い。胎土は密で 1mm 程度の白色の砂粒を含む。焼成は良好で、内外面ともに橙色を呈する。

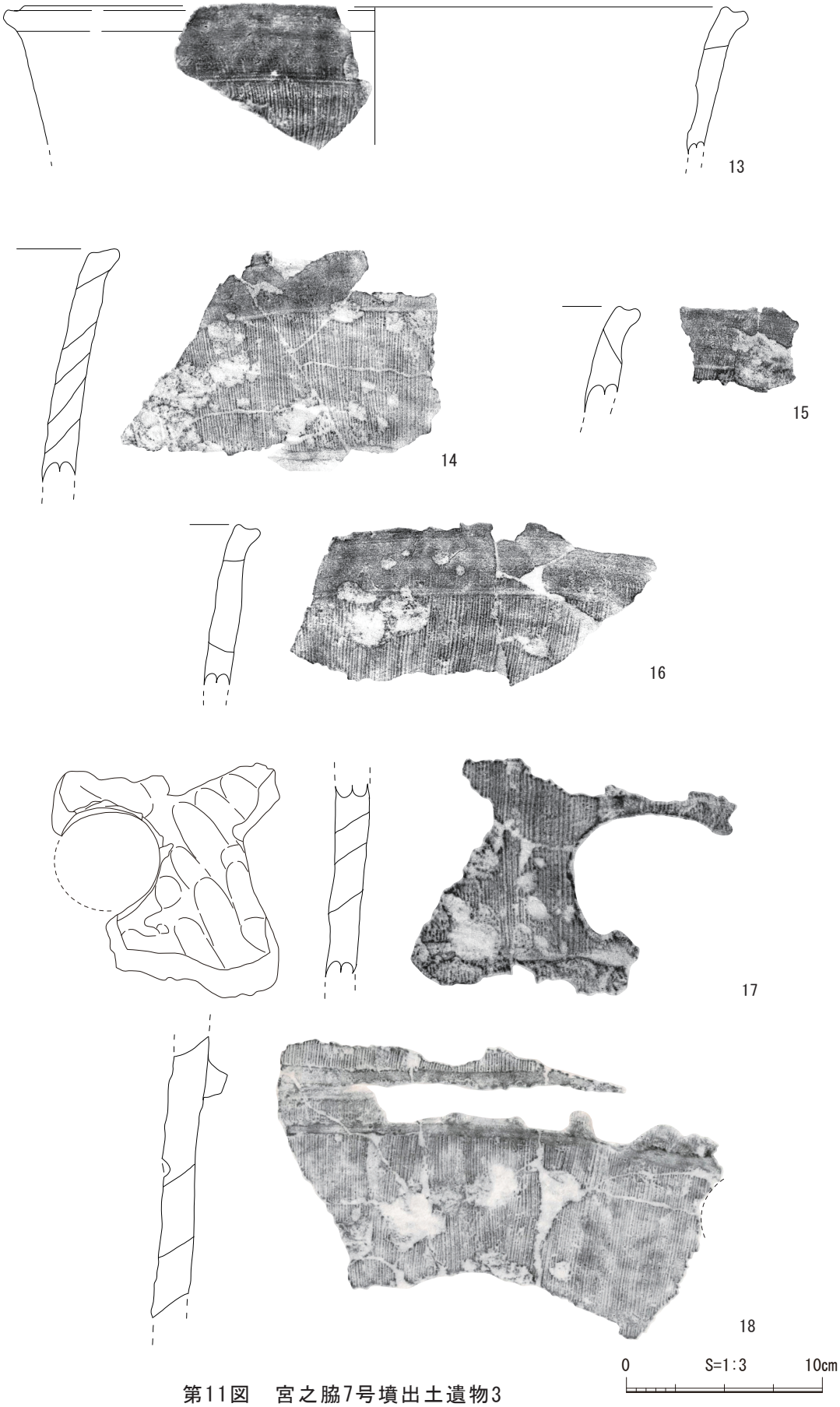
口縁部は概ね直線的であるが、部分的に外側につまみ出したように肥厚する部分がみられ、端部付近でわずかに外反する。口縁部上面にはわずかな窪みがみられる。突帯は直線的ではなく、部分的に湾曲するように貼り付けられ、1 条目、2 条目ともに台形の形状であるが、厚みが薄くやや高さがある。胴部にあけられた円形の透かしは直径約 4.4cm である。口縁部直下からタテハケが施されるが、摩耗のためか浅めである。内面には指ナデの痕跡が、基部底面には棒状圧痕がみられる。

C 類（13 ～ 29）

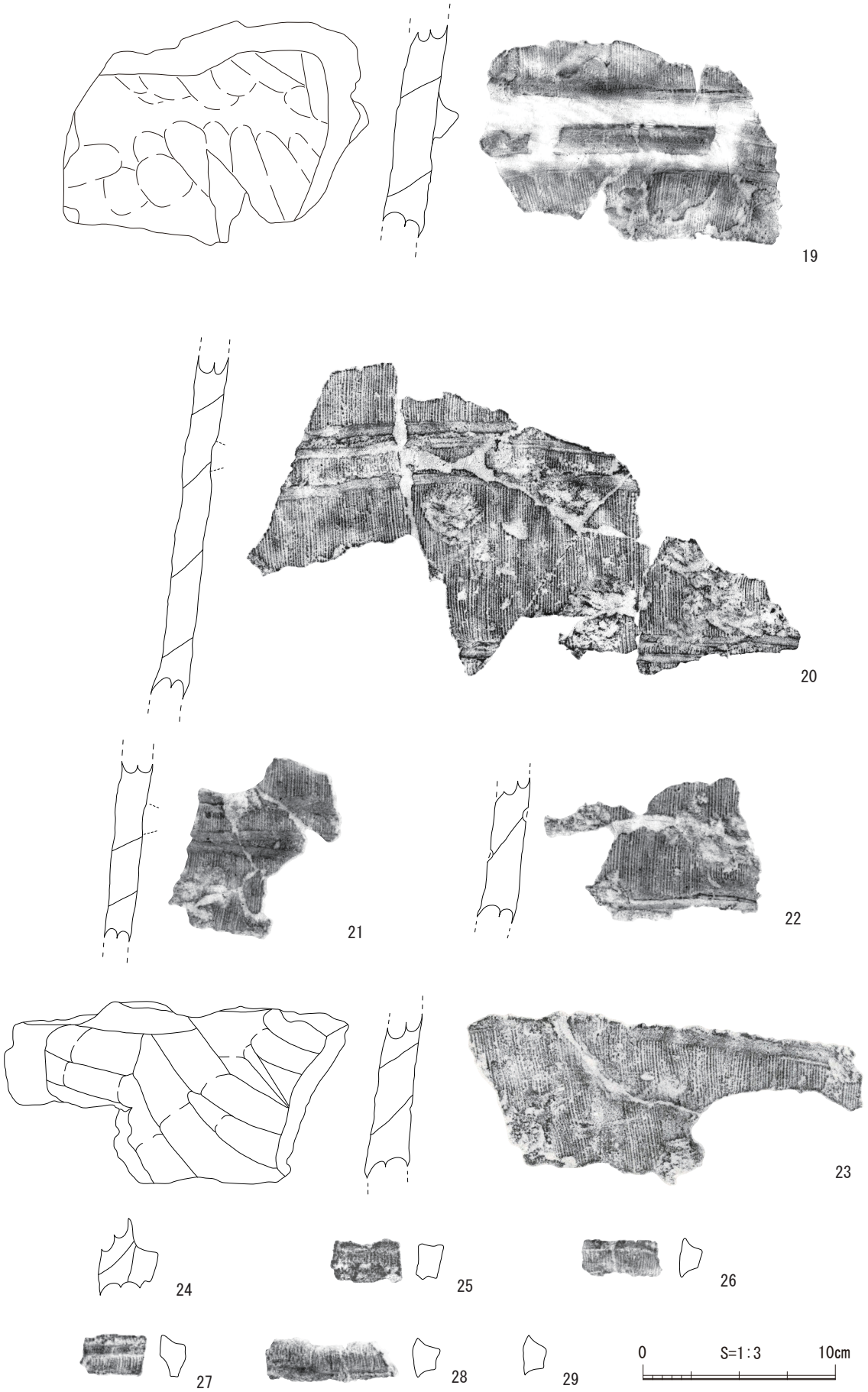
94 点（約 4,100g）の破片が出土している。口縁部、胴部はみられるが、底部は出土していない。胎土は密で 1mm 程度の白色、赤色の砂粒が含まれる。焼成は堅緻で、内外面は橙色を呈するが、B 類より暗めで褐色系である。口縁部は直線的で、端部で外側にわずかに肥厚する。口縁部上面にはわずかな窪みを有する。残存状況があまり良くないが、13 から口径を推定すると約 35cm となる。突帯は基本低い台形状であり、18 に円形の透孔が一部みられることから、18 に残るような台形状の突帯が 2 条目の突帯となる。19・24 のように高さがあり、下端が短い突帯は 18 などの他の突帯と形状が異なることや器壁が厚く基部近くであることから 1 条目の突帯である可能性が考えられる。そのため、C 類は高さがあり、下端が短い台形状が 1 条目の突帯、低い台形状が 2 条目の突帯と想定される。胴部にあけられた円形の透かしは直径約 5.3cm である。口縁部直下からタテハケが施され、内面には指ナデの痕跡がみられる。

D 類（30 ～ 43）

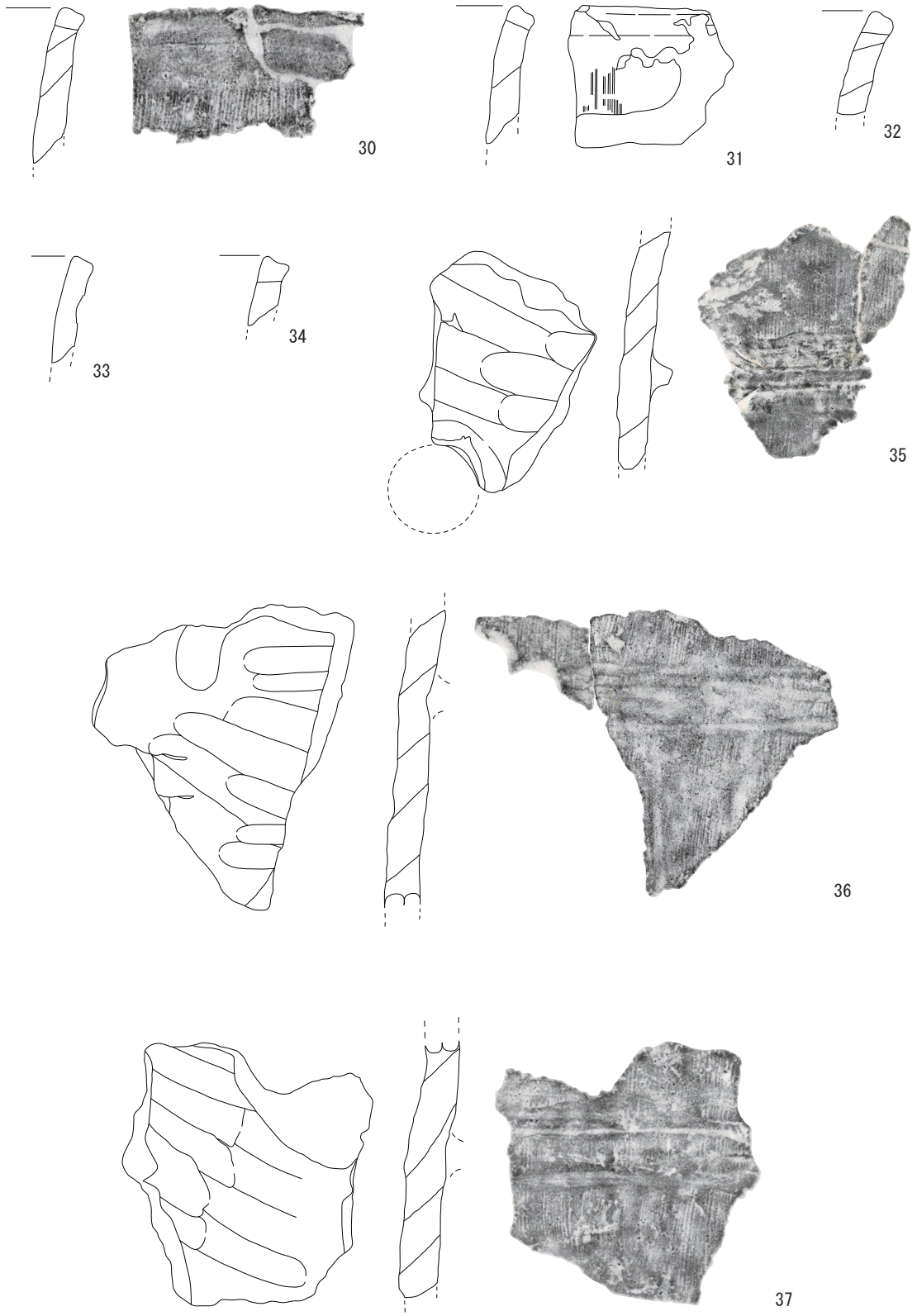
226 点（約 3,700g）の破片が出土している。口縁部、胴部、底部がみられるが、全体の形状は不明である。胎土は密で 1mm 程度の白色、赤色の砂粒が含まれる。焼成はやや不良で、内外面ともに浅黄橙色を呈し、器表面が荒れたり、口縁部や調整が摩耗している。口縁部は直線的で、わずかに外側に肥厚するものもみられ、上面にわずかな窪みを有する。突帯は台形状を呈する。40 の基部底面には棒状圧痕がみられる。35 から胴部にあけられた円形の透かしは直径約 4.4cm である。外面にはタテハケが施され、内面には指ナデの痕跡がみられる。



第11図　宮之脇7号墳出土遺物3

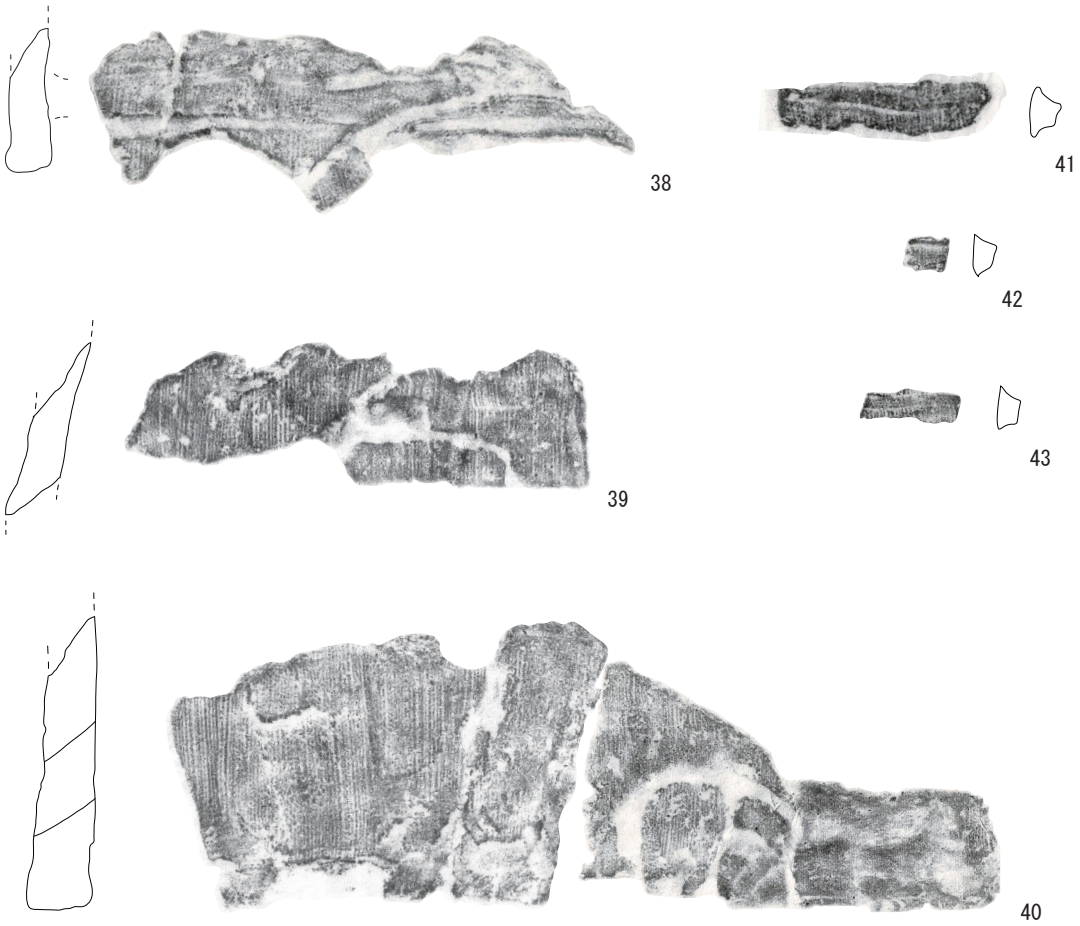


第12図　宮之脇7号墳出土遺物4



第13図　宮之脇7号墳出土遺物5

0　S=1:3　10cm



第14図　宮之脇7号墳出土遺物6

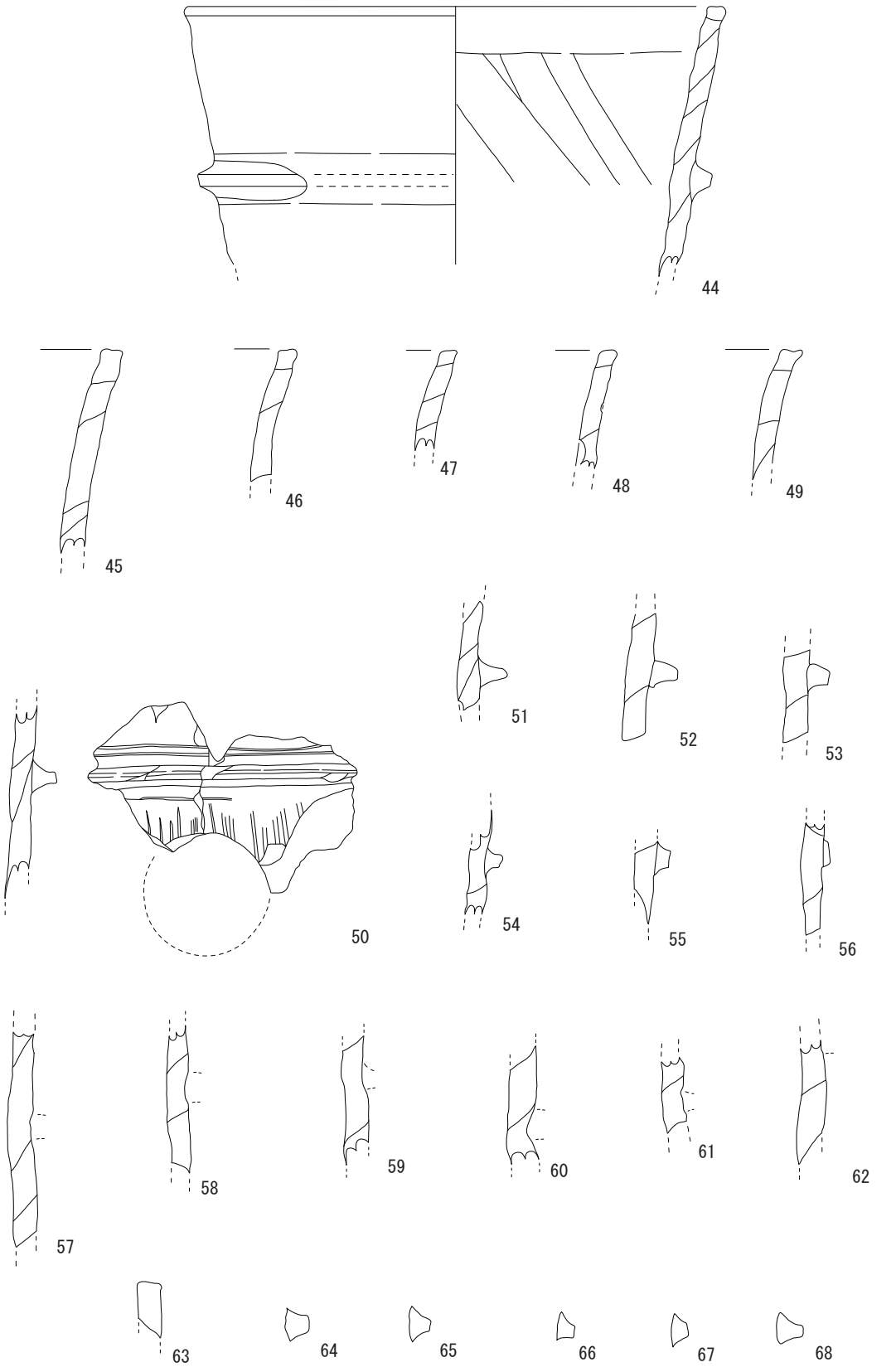
0　S=1:3　10cm

E類（44～68）

244点（約3,300g）が出土している。口縁部、胴部はみられるが、底部は出土していない。胎土は密で、1mm程度の白色の砂粒が含まれる。焼成は良好で固くしまり、内外面ともにぶい黄橙色を呈する。44は突帯中心部から口径までの距離が約8cmであり、45は下方にわずかに突帯が剥がれた痕跡があり、突帯から口径までの距離が約10cmを測る。両者は口縁部の形状や色調もやや異なることから同一個体と考えにくいため、E類は2個体以上あることがわかるが、破片では2個体の判別がつかないものも多い。

44の口縁部は直線的に立ち上がり、端部付近で外側にやや肥厚し、内面及び上面にわずかな窪みを有する。49のように外側に引き出されたような口縁部もみられるが、47～49は色調から同一種類の個体と考えられる。口径を推定すると約25cmとなる。45の口縁部は反り気味に立ち上がり、端部付近で直線的となる。

突帯は台形状（44、53、54、55、64、65、66、67）とつまみ出したような細長い長方形状（50、51、52、68）があり、後者は45と色調が似ているため、45と同一の個体と考えられる。E類の2個体は突帯の形状が異なる可能性がある。胴部にあけられた円形の透かしは直径約5.9cmである。外面はタテハケを施した後、ナデ消しているのか、タテ方向の調整痕がみられるが、明瞭ではない。



第15図　宮之脇7号墳出土遺物7

0　S=1:3　10cm

（３）鉄製品（69 ～ 76）

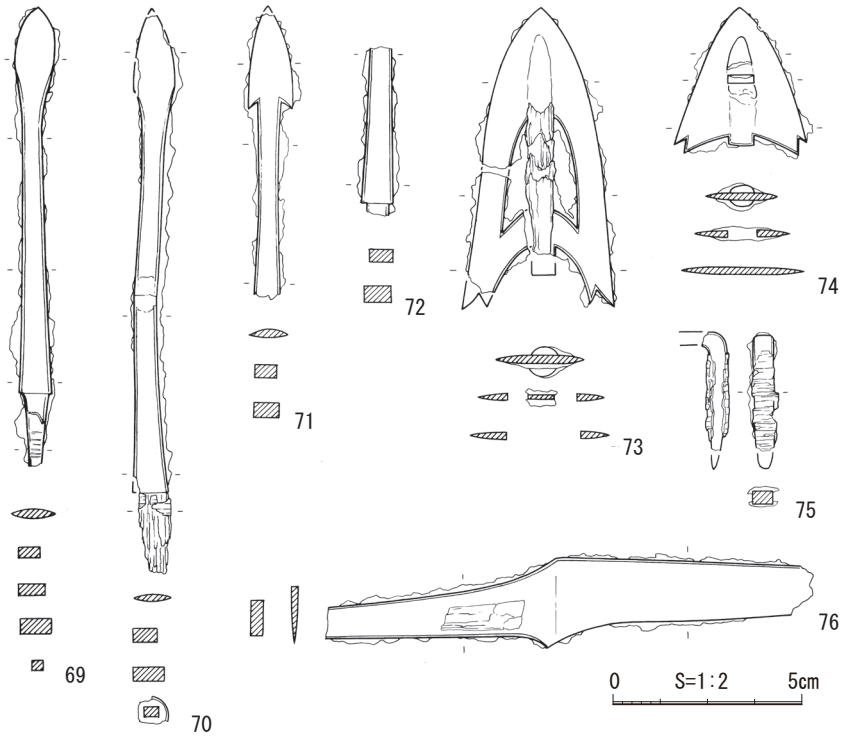
宮之脇７号墳から出土した鉄製品は鉄鏃６点（69 ～ 74）、鎹１点（75）、刀子１点（76）の合計８点である。このうち、鉄鏃と鎹は本墳の埋葬施設に伴うものと考えられる。

69 ～ 72 は有頸鏃である。69 は残存長 12.3cm、鏃身長 10.3cm の両刃長頸鏃である。刃部形状は柳葉状をなし、刃部断面は両丸造りもしくは緩やかな稜線を伴う両鎬造りとみられ、明瞭な刃部関を持たず頸部に移行する。茎関は有段関で茎には糸巻きの痕跡が残る。70 は残存長 14.9cm、推定鏃身長 12.8cm の両刃長頸鏃である。刃部は緩やかな屈曲がある、いわゆる蛇頭状を呈する。刃部断面形状は 69 と同様である。茎関の有段関で茎外面には矢柄と植物皮を用いた口巻きの一部が遺存する。71 は残存長 7.7cm の両刃有頸鏃である。刃部先端は尖り気味の三角形状を呈し、深めの逆刺をもつ。鏃身部が完存しないが、逆刺が発達する特徴と細身を呈する頸部形状から、長頸鏃である可能性が高い。72 は有頸鏃の頸部から茎関にかけての破片である。残存長は 4.5cm であり、71 と同様、細身を呈する頸部形状から、長頸鏃とみられる。73 及び 74 は根挟鏃である。73 は鏃身長 8.0cm、推定鏃身幅 4.0cm の大型品で中央部に左右対称の透孔が２つあけられている。舌の大部分は欠損しているが、わずかに下部に延びる部分が観察できる。逆刺先端には深めの重ね抉りがみられる。根挟みは鏃身先端近くまで伸びており、その先端は砲弾形を呈する。74 は鏃身長 3.9cm、鏃身幅 3.5cm の小型品である。鏃身中央部に根挟み緊縛用の方形の穴がみられ、下部に短めの舌が完存する。根挟みの特徴は 73 と同様である。75 は遺存部分が少ないものの、形状的な特徴から鎹と捉えられる（岡林 2013）。爪から直角に折れ曲がり、渡りに至る部分が観察できる。幅は 0.5cm、厚さは 0.4cm である。爪の内面と外面には木質が遺存しており、木棺材を繋ぎとめていたことをうかがわせる。76 は西側周溝埋土から出土した刀子である。残存長は 12.9cm、刃部と茎の先端はそれぞれ欠失している。刃部は大きく研ぎ減りしている様子が観察できる。

＜鉄鏃の評価＞

宮之脇７号墳の副葬品とみられる 69 ～ 74 の鉄鏃は、古墳時代中期の副葬鏃の組合せとしてまとまりがある。時期を詳細に検討できるのは長頸鏃の 69 と 70 である。69 は鏃身長 10.3cm であり、短頸鏃から脱却し長頸鏃として成立する段階の特徴を示す。70 は鏃身長 12.8cm であり、鏃身部が蛇頭状を呈すること、頸部が重厚であることなど、同じく出現期の長頸鏃の特徴を示す。これらの鉄鏃の帰属時期は、古墳時代中期中葉の新段階、筆者の鉄鏃編年（鈴木 2003）では中４期に位置付けられる。この段階は、須恵器編年の TK216 型式期に接点があり、本墳の築造時期を示すものと捉えてよいだろう。

２点ある根挟鏃も上述の時期と並行するとみて矛盾はない。とくに、二つの透孔をもつ大型の根挟鏃（双孔根挟鏃）は、福岡県永浦４号墳（甲斐編 2004）、福井県天神山７号墳（鈴木 2017）、兵庫県亀山古墳（立花・森編 2006）、埼玉県入西石塚古墳（藤野編 2020）、京都府宇治二子山南墳（杉本編 1991）、茨城県三昧塚古墳（忽那・佐々木・鈴木ほか 2019）など、古墳時代中期の甲冑出土古墳に伴う事例が目立ち、階層的に上位の武装であることを示している。宮之脇７号墳は一辺 14.6m ほどの方墳であるものの、この地域で円筒埴輪を初めて採用する古墳であり、宮之脇・稲荷塚・次郎兵衛塚古墳群の形成開始の契機ともなっている。こうした本墳の在り方は、双孔根挟鏃といった有力な武装を保有することと親和的であり、単純に墳形や墳丘規模の比較だけでは語れない古墳時代中期首長墳の実態を示す事例として注目できるだろう。



第16図　宮之脇7号墳出土遺物8

番号	種別	器種	出土位置	口径（cm）	器高（cm）	その他（cm）	胎土	焼成	色調	その他
1	土師器	壺	墳丘南側周溝	7.7	(10.0)	胴部径（13.4）	祖密	良好	褐色	松河戸Ⅱ式～宇田Ⅰ式
2	土師器	甕	墳丘南側周溝	(18.5)	(6.3)	—	祖密	良好	褐色	内外面ハケ目調整
3	土師器	壺	墳丘南側周溝	—	(5.0)	—	祖密	良好	褐色	
4	土師器	壺	墳丘北側周溝	—	(3.6)	—	祖密	良好	褐色	
5	土師器	壺	墳丘南側周溝	—	(2.7)	—	祖密	良好	褐色	内外面ハケ目調整
6	土師器	壺	墳丘南側周溝	—	(3.3)	底部径（3.6）	祖密	良好	褐色	
7	土師器	高坏	墳丘南側周溝	(16.0)	(3.5)	—	祖密	良好	褐色	
8	土師器	高坏	墳丘南側周溝	(15.8)	(2.9)	—	祖密	良好	褐色	
9	土師器	高坏	墳丘南側周溝	—	(6.5)	脚端部径（11.0）	祖密	良好	褐色	宇田Ⅰ式
10	須恵器	坏身	墳丘西側周溝	16.2	6.9	高台径11.3	密	やや不良	赤褐色	付高台。8C後半

第1表　土器・陶器観察表

番号	種別	部位	出土位置	計測値（cm）	残存高（cm）	器壁厚（cm）	備考
11	円筒埴輪	口縁部～底部	周溝南側及び西側	口径（23.3）底径（18.2）	37.8	1.4～2.0	底部裏に棒状圧痕
12	円筒埴輪	口縁部～底部	周溝北側	口径（31.5）底径（20.2）	46.6	0.8～2.0	底部裏に棒状圧痕
13	円筒埴輪	口縁部	周溝西側	口径（35.6）	7.7	1.1～1.5	口縁部残存率6%
14	円筒埴輪	口縁部	周溝西側	—	12.3	1.3～1.7	
15	円筒埴輪	円筒埴輪	周溝西側	—	5.5	1.2～1.6	
16	円筒埴輪	口縁部	周溝西側	—	8.3	1.1～1.4	
17	円筒埴輪	胴部	周溝西側	—	9.8	1.5～1.8	
18	円筒埴輪	胴部	周溝西側	突帯高さ1.1、幅1.1	14.4	1.6～1.8	
19	円筒埴輪	胴部	周溝南東側	突帯高さ1.2、幅1.7	11.0	2.0～2.2	
20	円筒埴輪	胴部	周溝西側	—	17.9	1.5～1.8	突帯欠如
21	円筒埴輪	胴部	周溝西側	—	9.3	1.5～1.7	
22	円筒埴輪	胴部	周溝西側	—	7.6	1.5～1.8	
23	円筒埴輪	胴部	周溝西側	—	7.8	1.9～2.2	
24	円筒埴輪	胴部	周溝北西側	突帯高さ1.3、幅1.6	4.1	1.5～1.7	
25	円筒埴輪	突帯	周溝西側	突帯高さ1.9、幅1.2	1.9	—	
26	円筒埴輪	突帯	周溝北西側	突帯高さ1.1、幅1.0	2.0	—	
27	円筒埴輪	突帯	周溝西側	突帯高さ1.3、幅1.7	2.3	—	
28	円筒埴輪	突帯	周溝北西側	突帯高さ1.5、幅1.1	2.0	—	
29	円筒埴輪	突帯	周溝北西側	突帯高さ1.3、幅1.0	2.1	—	
30	円筒埴輪	口縁部	周溝南西側	—	7.4	1.1～1.5	
31	円筒埴輪	口縁部	周溝南西側	—	6.7	1.3～1.5	
32	円筒埴輪	口縁部	周溝南西側	—	5.1	1.3～1.4	
33	円筒埴輪	口縁部	周溝南西側	—	5.2	1.0～1.1	
34	円筒埴輪	口縁部	周溝南西側	—	3.4	1.1～1.4	
35	円筒埴輪	胴部	周溝南西側	突帯高さ1.0、幅0.7	11.4	1.3～1.5	
36	円筒埴輪	胴部	周溝南西側	—	14.3	1.4～1.8	
37	円筒埴輪	胴部	周溝南西側	—	12.3	1.3～1.7	
38	円筒埴輪	胴部	周溝南西側	—	5.7	1.5～1.9	突帯欠如
39	円筒埴輪	胴部	周溝南西側	—	6.8	1.5～1.6	
40	円筒埴輪	底部	周溝南西側	—	11.7	2.0～2.6	底部裏に棒状圧痕
41	円筒埴輪	突帯	周溝西側	突帯高さ1.2、幅0.9	2.1	—	
42	円筒埴輪	突帯	周溝南西側	突帯高さ0.9、幅0.9	1.6	—	
43	円筒埴輪	突帯	周溝南西側	突帯高さ0.9、幅1.0	1.7	—	
44	円筒埴輪	口縁部	周溝南側	口径25.0 突帯高さ1.1、幅0.8	13.0	1.0～1.2	口縁部残存率17%
45	円筒埴輪	口縁部	周溝北側	—	9.8	1.0～1.2	
46	円筒埴輪	口縁部	周溝北側	—	6.3	0.8～1.1	
47	円筒埴輪	口縁部	周溝北側	—	4.8	0.8～1.0	
48	円筒埴輪	口縁部	周溝北側	—	5.8	0.8～1.0	
49	円筒埴輪	口縁部	周溝北側	—	6.3	0.9～1.0	
50	円筒埴輪	胴部	周溝北側	突帯高さ1.2、幅0.5	9.2	1.0～1.1	
51	円筒埴輪	胴部	周溝北側	突帯高さ1.3、幅0.5	5.0	0.8～1.1	
52	円筒埴輪	胴部	周溝北側	突帯高さ1.2、幅0.6	6.1	1.1～1.3	
53	円筒埴輪	胴部	周溝北側	突帯高さ1.1、幅0.6	4.5	1.0～1.2	下部に透孔
54	円筒埴輪	胴部	周溝南側	突帯高さ0.9、幅0.7	5.1	0.8～1.0	
55	円筒埴輪	胴部	周溝北側	突帯高さ0.7、幅0.9	4.0	0.9～1.0	
56	円筒埴輪	胴部	周溝北側	—	5.4	0.7～1.1	突帯一部欠損
57	円筒埴輪	胴部	周溝北側	—	10.2	1.0～1.2	突帯欠如
58	円筒埴輪	胴部	周溝北側	—	7.2	0.9～1.1	突帯欠如
59	円筒埴輪	胴部	周溝南側	—	6.2	0.9～1.1	突帯欠如
60	円筒埴輪	胴部	周溝北側	—	5.5	1.0～1.3	突帯欠如
61	円筒埴輪	胴部	墳頂後黒	—	3.6	0.9～1.1	突帯欠如
62	円筒埴輪	胴部	周溝北側	—	6.0	0.9～1.2	突帯欠如
63	円筒埴輪	胴部	周溝北側	—	2.6	1.1～1.2	上部に透孔
64	円筒埴輪	突帯	周溝北側	突帯高さ1.2、幅0.8	1.6	—	
65	円筒埴輪	突帯	周溝南東側	突帯高さ1.0、幅0.5	1.6	—	
66	円筒埴輪	突帯	周溝北側	突帯高さ0.8、幅0.6	1.3	—	
67	円筒埴輪	突帯	墳丘後世の埋立土	突帯高さ0.8、幅0.6	1.6	—	
68	円筒埴輪	突帯	周溝北側	突帯高さ1.3、幅0.5	1.5	—	

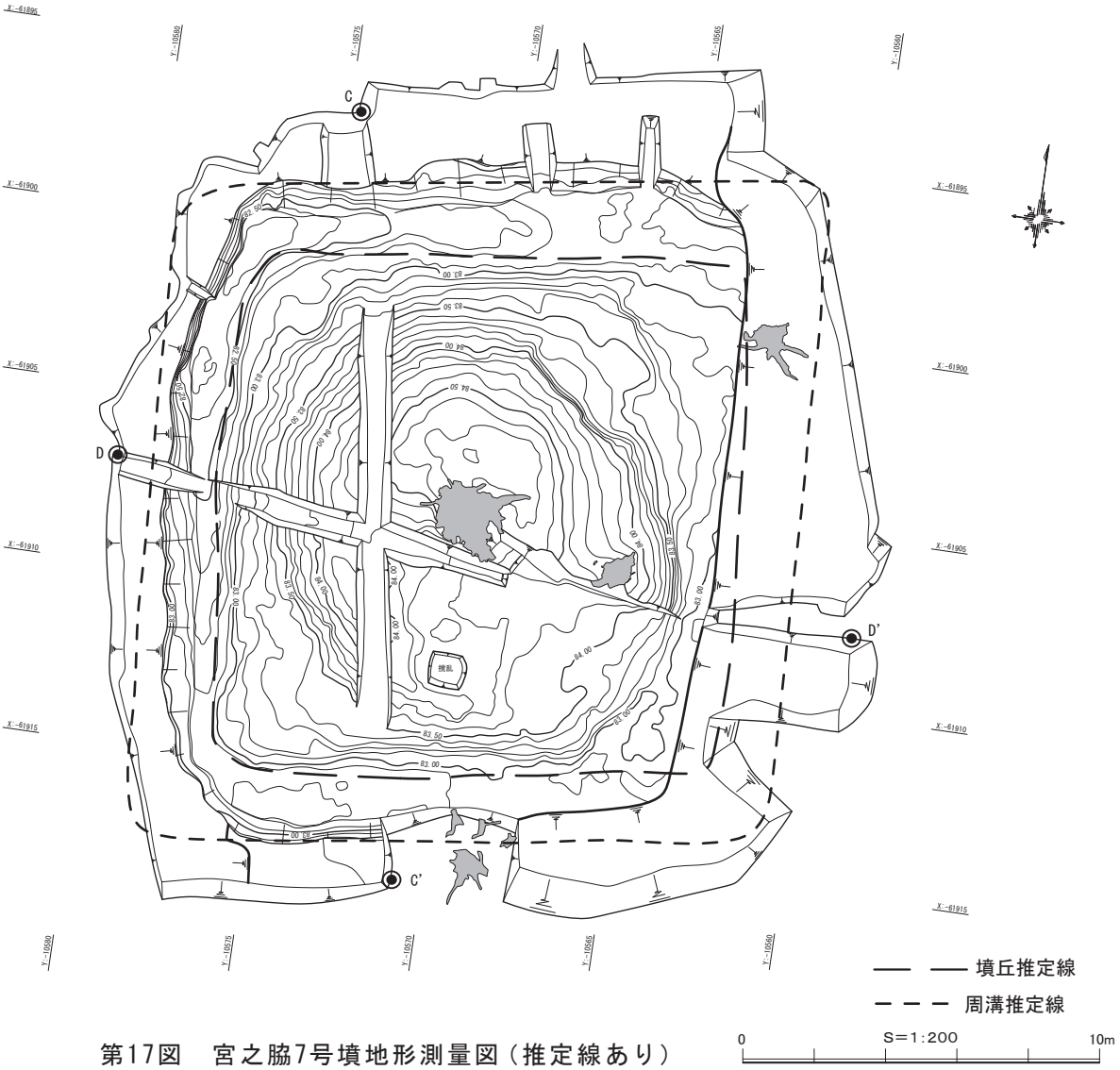
第2表　埴輪観察表

番号	器種	大きさ（cm）					備考
		長さ	幅	厚さ	鏃身・刃部	茎部・柄部	
69	鉄鏃	(12.3)	0.5～1.0	0.3～0.5	10.3	(2.0)	茎部欠損
70	鉄鏃	(14.9)	0.6～1.1	0.2～0.4	(12.8)	(2.1)	茎部欠損
71	鉄鏃	(7.7)	0.6～1.1	0.3～0.4	(7.7)	—	頸部、茎部欠損
72	鉄鏃	(4.5)	0.6	0.6	(4.1)	(0.4)	鏃身、茎部欠損
73	鉄鏃	8.0	(4.0)	0.2～0.8	8.0	—	矢柄と木質が遺存
74	鉄鏃	(3.9)	3.5	0.2～0.7	3.6	—	根挟み緊縛用の方形の穴あり
75	鎹	(3.1)	0.5	0.4	—	—	外面に木質が遺存
76	刀子	(12.9)	刃部1.9 茎部0.9	刃部0.2 茎部0.5	(7.5)	(5.4)	刃部と茎の先端が欠失

第3表
鉄製品観察表

第４章　まとめ

宮之脇７号墳は飛騨川と木曽川の合流点に築かれた一辺約 14.6m の方墳であり、「川からみえる」ということを重視した立地にみえる。後世の改変が大きく入っているが、盛土は黄褐色と黒色の土が交互に盛られて造られており、企画性や丁寧な造り方をされていることが分かる。周溝は幅約 3.0m であり、周溝からは古墳に伴う遺物として土師器や埴輪が出土している。出土した土師器は細片が多いが、松河戸Ⅱ式から宇田Ⅰ式の時期である。古墳の年代観は須恵器が出土しないことや円筒埴輪が無黒斑であること、鉄鏃などから５世紀中葉頃に築かれた古墳と考えられる。



第17図　宮之脇7号墳地形測量図（推定線あり）

埋葬施設は後世の改変により残っていないが、土層から構築墓壙によって築かれたと考えられ、鎹が出ていることを積極的に評価すれば組み合わせ式木棺の可能性が考えられる。副葬品として考えられる遺物として後世の埋立土から出土した鉄鏃があげられる。鉄鏃は古墳時代中期の副葬鏃の組合せとしてまとまりがあり、周辺に当該期の古墳がないことからも宮之脇７号墳の副葬品の可能性が高い。鉄鏃の他には、伝承によれば鉄刀（所在不明）が副葬されていたこととなる。

外表施設としては葺石と埴輪があげられる。葺石は北西及び南西の角は明確で、南側は葺石と考えられる川原石が残っているが、改変のせいもあり葺石全体の様相は明確ではない。また、盛土の中にも川原石が多く含まれており、意図的に川原石を盛土に入れていた可能性も考えられる。

埴輪は円筒埴輪のみであり、形象埴輪などはみられない。古墳を周溝も含め完掘したにも関わらず、全体形状が分からない埴輪があるが、円筒埴輪は5種類みられる。墳丘裾部あたりに樹立痕がみられなかったが、削られた墳頂部もしくはテラス部分に樹立し、出土した点数から想定すると6個体以上（A類～D類1個体以上、E類2個体以上）が間隔をあけて並んでいたと考えられる(※1)。周溝の出土傾向から南側にはA類とD類、北側にはB類、西側にはC類が、E類は北側及び南側に樹立していたと想定される。東側は改変が入っているため、明確ではないが、南側に偏りがあるため、南側の一部が東側に樹立していたことも想定される。

円筒埴輪5種類の共通点は下記の3点である。

(1) 無黒斑であり、胎土は密で1mm程度の白色の砂粒を含む。(C・D類は赤色の砂粒も含む)

(2) 口縁部は直線的、もしくはわずかに外反、肥厚する。上面にはわずかな窪みを有する。

(3) 外面には幅約2cmのタテハケが施され、内面は指ナデ調整がみられる。

このように3つの共通点があり、古墳の規模やA類、B類から推定すると、2条3段で透孔数は2孔である。法量をみると、A類、E類が口径25cm前後、B類は約30cm、C類は約35cmと一つの古墳としては差異があるが、2条3段の尾張型埴輪にみられる法量のまとまりがおおまかにみられる。A類、B類の突帯間の長さがほぼ一定であることや、各種類の突帯がはがれた部分に凹線があり、突帯設定技法がみられることからも埴輪の作り方が分かっている、もしくは作り方を分かっている人の指導を受けて作っていることが考えられる。ただ、共通項はあるものの、突帯の形状や色調や法量など多様な様相がみられる。

この時期の埴輪は岐阜県内では東濃(※2)では出土はなく、中濃の琴塚古墳、西濃の登越古墳、中八幡古墳と大規模古墳にしかみられない。この段階ではB種ヨコハケが導入されている段階であり、調整技法でいえば一時調整にタテハケを用いているのは保守的な様相でもある。尾張では5世紀中葉のタテハケを多用する赤褐色の埴輪として、牛牧6・9号墳、名古屋城三の丸遺跡2号墳があげられるが、突帯や口縁部の形状やタテハケの様相には違いがみられる。後に築かれた宮之脇11号墳や集落での製塩の様子など尾張地域との関連性が川合地区ではみられていることからも埴輪も尾張からの影響が想定される。穴窯焼成が始まった初期の段階で導入された宮之脇7号墳の埴輪について、類例の検討や埴輪がどこで焼かれ、技術などがどこから供給されたのかなど今後の課題といえる。

川合古墳群の展開と宮之脇7号墳の位置づけ

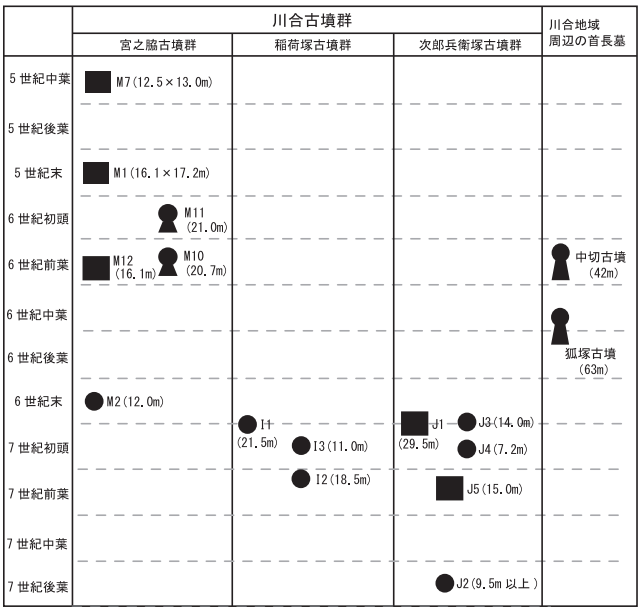
宮之脇7号墳は古墳時代中期中葉に築かれた方墳であり、前方後円墳である狐塚古墳が築かれるよりも前に築かれた川合地域の端緒となる古墳といえる。宮之脇7号墳が所在する川合古墳群は小地域でみると宮之脇古墳群、稲荷塚古墳群、次郎兵衛塚古墳群に分かれている。滅失や残存状況により時期が明らかになっていない古墳もあるが、おおまかな時期の変遷をみると、西側に位置する宮之脇古墳群から東側に所在する稲荷塚古墳群及び次郎兵衛塚古墳群へと古墳が築造される位置が移動する傾向がある。集落とともに見てみると、川沿いには古墳時代前期と後期を主体とする集落（宮之脇遺跡）が営まれている。古墳時代後期の間に河川からの視認性や生産活動を重視して古墳と住居が近接して川沿いに営まれていた時期（5世紀末から6世紀前半）から川沿いの集落域と東側の造墓域とを分ける時期（6世紀末以降）に変遷しているようである。その中で宮之脇7号墳から

宮之脇１号墳、その後の次郎兵衛塚１号墳へと「方墳」という墳丘形状は、間は空きながらも一定の連続性がみられる。ただ、５世紀後葉及び狐塚古墳が築かれた６世紀中葉から後葉には古墳の築かれない空白期間が現段階ではある。

上記の空白期間の可児地域及び川合地区の動態、宮之脇７号墳の造営集団や宮之脇７号墳に周辺地域に採用されていない埴輪が樹立された意義ついては周辺の調査を進めるとともに今後も検討する必要があろう。

※１　破片の点数は遺物の項で記した通り、ある程度あるが、５種類の中でＣ～Ｅ類は１固体の破片なのか、複数個体の破片なのかは判断が難しい。

※２　瑞浪市戸狩荒神塚古墳では、埴輪の破片が採集されているが、有黒斑で調整は不明であり、点数は少ない。



第18図
川合地区の古墳変遷

＜参考文献＞

岡林孝作　2013 「古墳出土鋏の使用法」『橿原考古学研究所論集第十六』八木書店　pp.111 - 122

甲斐孝司編　2004 『永浦遺跡』 古賀市教育委員会

可児市　2005 『可児市史　第一巻　通史編　考古・文化財』

可児市教育委員会　1994 『川合遺跡群』

岐阜県教育委員会　美濃加茂市教育委員会　1973 『牧野小山遺跡』

岐阜県教育委員会　可児町教育委員会　1976 『宮之脇遺跡発掘調査報告書』

岐阜県文化財保護センター　2012 『牧野小山遺跡』

忽那敬三・佐々木憲一・鈴木一有ほか　2019 「茨城県三昧塚古墳出土遺物の研究」『明治大学博物館研究報告』 第 23 号 pp.1 - 54

財団法人岐阜県文化財保護センター　1998 『牧野小山遺跡　Ｃ地点』 岐阜県文化財保護センター調査報告書第 39 集

財団法人岐阜県文化財保護センター　2006 『上恵土城跡・浦畑遺跡』 岐阜県文化財保護センター調査報告書第 101 集

酒井将史　2018 「美濃の円筒埴輪の編年と画期」『東海の埴輪－出現と終焉、地域性を探る－』 第 31 回考古学研究会東海例会

杉本宏編　1991 『宇治二子山古墳発掘調査報告書』 宇治市教育委員会

鈴木一有　2003 「中期古墳における副葬鏃の特質」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 11 集　帝京大学山梨文化財研究所　pp.49 - 70

鈴木一有　2017 「天神山７号墳から出土した鉄鏃の検討」『天神山古墳群再考』天神山古墳群研究会　pp.47 - 56

瀬川貴文　2011 「尾張における中期以降の円筒埴輪について」『志段味古墳群』 名古屋市教育委員会

立花聡・森幸三編　2006 『玉丘古墳群Ⅱ』 加西市教育委員会

藤野一之編　2020 『入西石塚古墳出土遺物整理報告書』坂戸市教育委員会

美濃加茂市　1980 『美濃加茂市史』通史編

美濃加茂市　2023 『牧野小山遺跡』

図版1

宮之脇７号墳と木曽川および飛騨川（南西より）

完掘状況（上空より）

図版2

完掘状況（南より）

完掘状況（西より）

調査前全景（南より）

A-A'土層（東より）

後世の埋立土内鉄鏃出土状況（西より）

C-C'トレンチ北側周溝（西より）

C-C'トレンチ北側墳丘（北西より）

C-C'トレンチ南側墳丘（南西より）

C-C'トレンチ南側周溝（西より）

D-D'トレンチ西側周溝（南より）

図版4

D-D'トレンチ西側墳丘盛土（南西より）

D-D'トレンチ東側墳丘盛土（南東より）

D-D' トレンチ東側周溝（南より）

周溝南西側埴輪出土状況（東より）

周溝南側遺物出土状況（南より）

完掘後西辺（北より）

完掘後南辺（西より）

完掘後東辺と北辺（北東より）

図版5

1

2

3

5

6

7

8

9

10

11

11

図版6

図版7

12

12

12

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

28

28

図版8

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

40

44

45

46

47

48

49

50

51

52

図版9

53

54

57

58

59

60

61

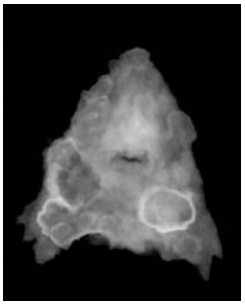
62

68

73

74

74



73

69

70

71

75

76

報　告　書　抄　録

ふりがな	みやのわきななごうふんはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	宮之脇７号墳発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　名	
シリーズ名	可児市埋文調査報告
シリーズ番号	61
編集者名	長江　真和　　鈴木　一有
編集機関	可児市経済交流部　歴史資産課
所 在 地	〒509-0292　岐阜県可児市広見一丁目１番地
発行年月日	西暦 2024 年 12 月 24 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地名	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 面　積	調査原因
みやのわき 宮之脇７号墳	かにしかわいき たにちょうめ 可児市川合北二 丁目 158	21214	4718	35° 26′ 19″	137° 3′ 11″	20230829 ～ 20231117 400 ㎡	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮之脇７号墳	古墳	古墳	古墳	土師器、埴輪、鉄製品 縄文土器	古墳時代中期中葉の一辺約 14.6m の方墳。

要　　約	宮之脇７号墳は、古墳時代中期中葉に築かれた一辺約 14.6m の方墳である。墳丘には部分的に葺石が残っており、円筒埴輪を樹立していたと想定される。墳丘の大半は大きく削られ、埋葬施設は滅失しているが、構築墓壙で、組み合わせ式木棺であることが想定される。 古墳に伴う出土遺物は、円筒埴輪や土師器があり、須恵器は出土していない。後世の埋土から埋葬施設に副葬されたと考えられる鉄鏃が６本点出土している。円筒埴輪は無黒斑でタテハケ調整のみが施され、５種類に分類できる。

可児市埋文調査報告　61
宮之脇７号墳発掘調査報告書
令和６年 12 月 24 日　印刷
令和６年 12 月 24 日　発行
編集・発行　可児市経済交流部　歴史資産課
〒 509-0292　岐阜県可児市広見一丁目１番地
Tel　0574-62-1111　Fax　0574-63-6751
印　　刷　有限会社ヤマモト印刷